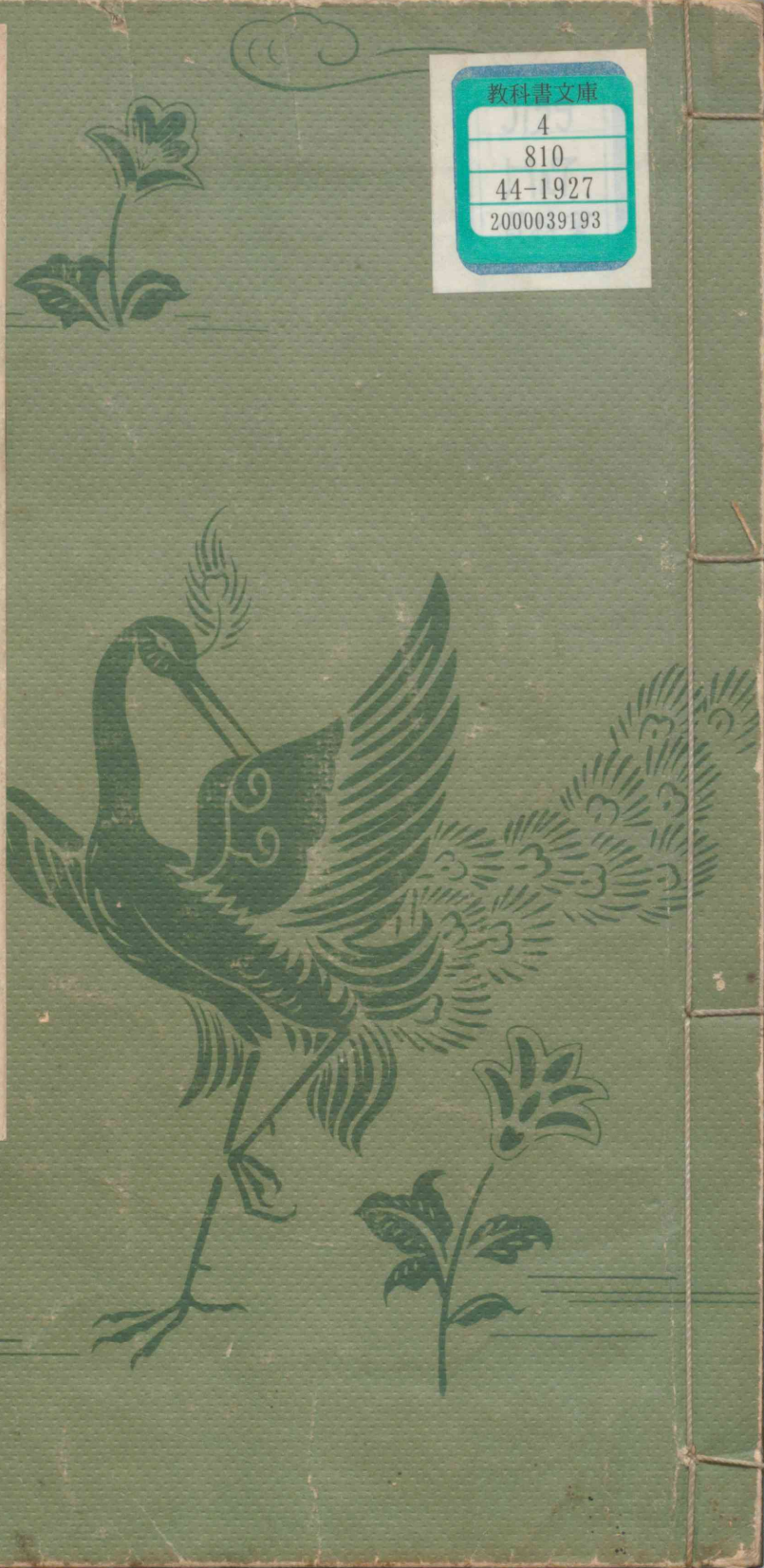
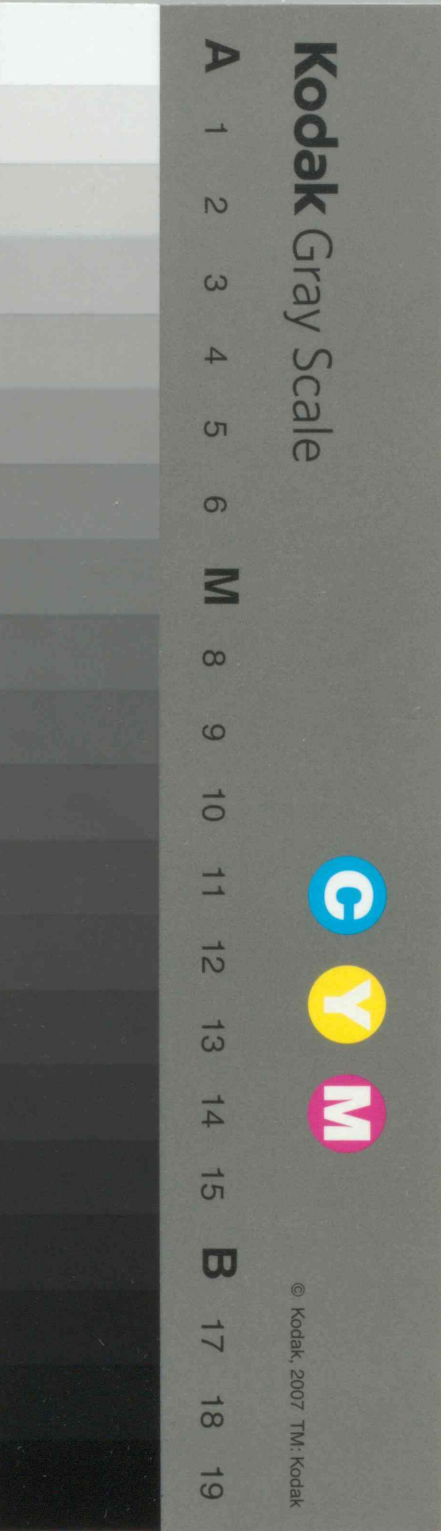
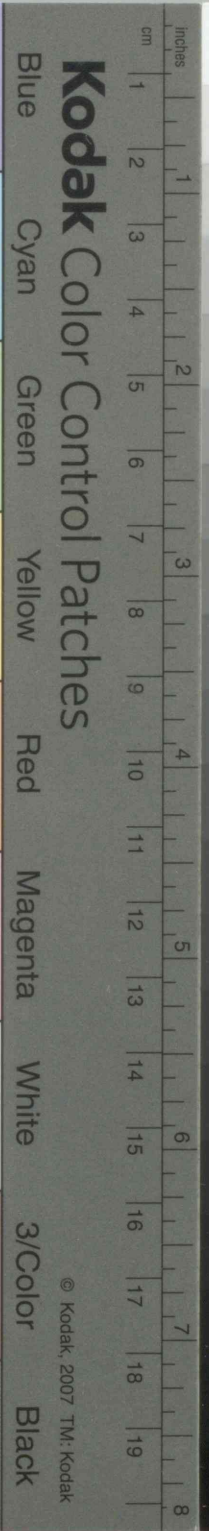
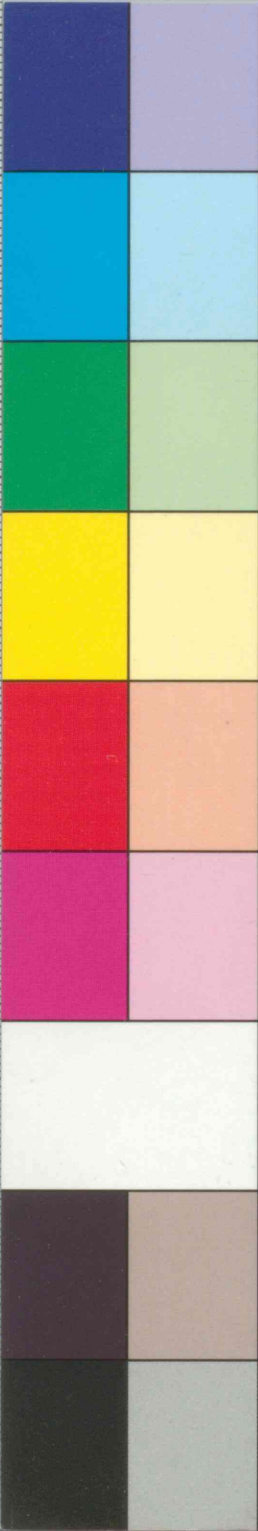


實業帝國新讀本  
卷二



教科書文庫  
4  
810  
44-1927  
2000039193



43328

教科書文庫

4
810
44-1927
2000039193



© Kodak, 2007 TM: Kodak



教科書文庫  
4  
810  
44-1927  
2000039193

話の起縁



筆洋天田太 現出風白

375.9  
Ha7

資料室  
中央図書館

廣島大学  
図書印

39193  
文学博士芳賀矢一編

實業帝國新讀本

東京

合資  
會社 富山房發兌

広島大学図書  
2000039193





實業帝國新讀本 卷二目次

一	春夏秋冬……………	渡邊霞亭……………四
二	日の岬……………	萩野由之……………三
	古代に於ける日鮮の關係自修文……………	沼波瓊音……………二七
三	蟲の聲……………	志賀直哉……………二
四	鞍馬の火祭……………	白鳥省吾……………三〇
五	秋 晴……………	中村武羅夫……………三
六	秋の風物二三……………	薄田泣菫……………六
七	小さい旅人……………	中村秋香……………六
八	歌 話……………	一とりの坂……………六

目

次

一

六



二 あがたの宿……………四

三 焼野の原……………四九

九 フレデリック大王と酒井備後守……………幣原 坦…三

一〇 あぢ釣……………德富健次郎…五五  
(高等小學讀本)…六二

二 海の朝……………河井 醉名…六四

三 雨の焚火……………一

三 冬のくる頃……………島崎 藤村…七  
一霜……………長塚 節…七  
 二木 枯……………橘 南 谿…七

四 藤樹先生……………最も偉大な豪傑(自修文)…八〇

五 三都氣質その一……………鶴見 祐輔…八六

六 三都氣質その二……………鶴見 祐輔…九二

七 快 活……………下田次郎…九

八 細川幽齋と太田道灌……………一〇〇

九 風の古里……………演田 廣介…一〇四  
三人の時計(自修文)…長 與 善 郎…一〇六

一〇 新 年……………二一

二 眞の知己……………(高等小學讀本)…二五

三 沼津千本松原……………若山 牧水…二九

三 松と大和心……………池邊 義 象…二六  
縁起の話(自修文)…關 根 正 直…二四

二 諏訪湖畔の冬……………島 木 赤 彦…二九

五 冬から春への北國……………小川 未 明…二四

六 野 梅……………近松 秋 江…二〇  
九官鳥と鶯(自修文)…土 岐 善 麿…二五



- 二七 大石良雄その一……………山路愛山…二五
- 二八 大石良雄その二……………山路愛山…二五
- 元 太陽と春……………福田正夫…二六九
- 三 童 心……………北原白秋…二七
- 三 自然の生命の働……………相馬御風…二七
- 三 若 芽……………吉江喬松…二八
- ボ 子自修文……………二葉亭四迷…二九〇
- 三 皇室と國民…………………………二九五
- 三 君が御代(短歌)…………………………二九六



# 實業帝國新讀本 卷二

## 一 春夏秋冬

空も霞みて、	とほ山の
さくら花さく	永き日に、
さへづる鳥の	聲聞けば、
春の喜	はてもなし。
柳の緑	菜の花の
あや織る野邊に	旅寝して、
曇りもはてず	照りもせぬ

(一)「照りもせず  
曇りもはてぬ  
春の夜の、お  
ぼろ月夜にし  
くものぞなし  
き。」(新古今  
集 大江千里)



風情

いさゝ小川

(一)「秋來ぬと目  
にはさやかに  
見えねども  
風の音にぞ驚  
かれぬる。」  
(古今集 藤原  
敏行)  
さやかに

月を見るこそ

二

ほとゝぎす鳴く

卯の花白く

夏をあしたの

春にもまして

晝の暑さを

流して庭の

いさゝ小川の

螢飛ぶこそ

三

いつか夏去り

目にはさやかに

うれしけれ

森かげに、

咲出づる

眺こそ、

風情あれ。

行水に

ゆふ涼、

水の面を

うれしけれ。

秋來ぬと、

見えねども、

風の音にも

こもりて、秋は

萩のうねりに

命とたのみ

聲もふけ行く

書を讀むこそ

四

林まばらに

寒げに見ゆる

裏の大川

橋の脚いと

雪降りつもる

あろりにそだを

静けさの

もの寂し。

散る露を、

鳴く蟲の

夜半の窓、

うれしけれ。

葉は落ちて、

鳥の宿

水あせて、

高きかな。

家の外、

折りくべて、

(一)「白露をこぼ  
りかね。萩のうね  
りかな。」  
(芭蕉)

あす



親はらからの  
語り合ふこそ

ながき夜を  
うれしけれ。

(一)島根縣(出雲國)の西北岸。出雲大社の東北で、海に斗出してゐる。

## 二 日の岬

渡邊霞亭

さして

私は舊日本の風光が好きです、人間が好きです、温泉が好きです、食物が好きです。表の方では内海の景色と、それから鯛網でとれる鯛が好きですが、裏の方ではすべてが好きです。殊に山陰の風光は、山嫌ひな私に綱をつけて引張つてくれまます。さして用もないのに三度までも、あのどす黒い煤煙だらけの汽車に乗りこんで、日の岬のはてまで出かけたのは、よくよくのあこがれをもつからではありませんか。私は

(二)Tunnel.  
(隧道)

穿りも穿つたり

さしもの

(一)鳥取縣(伯耆國)東伯郡倉吉町



(筆峰旭野上) 景風陰山

世の中に何が一番嫌ひなといつて、長い(一)トンネルを汽車で通るほど嫌ひなことはありません。ひどい時は、大きな魔の手で胸をおさへつけられたやうな苦みも感じます。それが大阪から倉吉まで、(二)哩數にしたら百二三十哩ほどの間に、七十六と、穿りも穿つたり、通りも通つたり、まるでトンネルばかりの間を驅けてゐるやうなものです。が、さしものトンネルも、山陰の道中では餘り苦痛に感じません。おや、またお出でなすつたよ。くらゐで、平氣でゐます。そのまた



明媚

浮世の状態

感興

トンネルを出た所には、きつと明媚な風光があります。古い譬ではあるが、苦のあとには樂のある浮世の状態を見せてゐるやうで、一種の感興を催します。

その樂がちよつとの間で、また苦の世界へ進み入る。それが餘り早いので、全く頭痛を感じないわけにはまゐりませぬが、そこが自分のずつと太古の先祖の故郷であると思ふと、自然に懐かしさが浮かんで來ます。乗つてゐる汽車の上にも下にも、先祖の足跡がついてゐるかと思ふと、一々御辭儀したくなります。私は子供の時から大國主命(一)が好きです。「大黒様といふ方は、一に俵を踏んまいて、二ににつこり笑つて。」と謠はせられた時から大好きです。それは俵を踏まへて

(一)素戔鳴尊の御子の出雲大社の祭神

お立ちになつた御様子(一)が、福々しくてよいからではありません。振上げた槌の中から、無數な寶が出るからでもあります。私は自ら大黒様の御家來であると信じてゐるからであります。少くとも私のずつと昔の先祖は、大黒様の御靴をさげて、大黒様が裏日本を御經營なすつた時の御供をしたものであらうと思つてゐるからです。

それなら、も少し福の神の御蔭を受けさうなものだといふ人もあるか知れませんが、私はどんなに貧乏でも、三千年前の先祖は大黒様の御家來であつたといふことを、たとひ先祖から傳はつた鏝一つないにしろ、私の魂はちやんと承知してゐます。だからこそ出嫌ひな私が、山陰まで罷り出て、



(一)島根縣(出雲國)簸川郡杵築町の海濱の舊名

(二)神産巢日神の御子。大國主命を助けて國土を經營された神

(三)經津主神と天照大神との命を受けて、出雲に大國主命から國土を授けられた。

(四)上代の勇將。茨城縣(常陸國)鹿島神社の祭神

(五)千葉縣(下總國)香取神社の祭神

土の香を嗅ぐのではありませんか。先祖が忠義もし、遊びもしたらうと思はれるところどころの昔からの面影にあこがれて、そこらを驅歩いたではありませんか。

その中で一等私の心をそつたのは日の岬です。

日の岬へは伊那佐(一)の濱から小舟に乗ります。海上三里ほどもありませんから、運の悪い人は、二日も三日も逗留して、日和出しませんから、運の悪い人は、二日も三日も逗留して、日和を待つことがあります。これで三度くるが、一度も舟が出ない。と、泣顔して歸る人もあります。

伊那佐(二)の濱は少彦名命(三)が始めて潮に乗つて出て來られた所、武御雷神(四)と經津主神(五)とが大國主命に國讓の交渉をし

靈跡

慰勞

もだし難い



日の岬

た所で、大黒様には最も關係の深い土地、また日本國民に取つては忘れることのできぬ靈跡です。私の先祖も大國主命が國を平げて、始めてこの濱へお出でになつて、御慰勞の酒宴をお開きなされた時、定めて大いに杯を上げたでせう。主命もだし難く、首に掛けた出雲石や勾玉をかちかちといはせて、つまりぬ舞などを御目に掛けましたでせうが、この二神との國讓の交渉には、どんなに心配したでせう。私はこここの濱に立つて、朝日に風



渺茫たる

微塵にする

ぎわたる海の景色に接した時ほど、爽快な、そして懐かしい、  
 そして遣瀨ない思を感じたことはありません。  
 伊那佐の濱を出て日の岬へ行く間には、一つ一つ古い歴  
 史と傳説とをもつた多くの岩が、渺茫たる波濤の間に見え  
 隠れして、私たちを送り迎へしてくれませぬ。中にも武御雷神  
 が、ぐづぐづいつたら、この通り微塵にするぞ。と威して、海中  
 へ投げられたといふ千引の岩もあります。甲の緘を見るや  
 うに、段々刻みになつた甲岩もあります。潮の色も、藻のかを  
 りも、三千年前の姿をそのまま、にもつてゐるかと思ふと、自  
 然に起る感激の涙が、舷にかゝります。

(一) 出雲大社の東  
 北にある出雲  
 山の別名

鼻高山(一)を右手に見て、岩礁の間から舟路が變ると、そこに

(一) 鏡川郡日御崎  
 村に在る國幣  
 中社と天照大神  
 尊と天照大神  
 今と祭神とし  
 社とは日御崎と  
 社といつてゐ

日の岬の船着場が見えます。一面の老松、その上に無数の白  
 い鷗が舞遊び、御崎神社(一)の棟木が松の葉隠れに見えます。そ  
 れを見ると、故郷へ歸つた時のやうな歡喜が、胸をついて出  
 ました。向かつて右手は茂つたまゝの竹垣で、それが右の方  
 へ五六十間も延びてゐます。その垣は風を防ぐ爲でもあり、  
 また波を防ぐ用にもなります。ところどころに四角な切  
 穴があつて、そこから人間が出入します。

垣の中には、少くとも二三十戸の人家があるらしく、枯れ  
 て白くなつた笹葉の間から、家の棟が見えてゐます。白い炊  
 烟が昇つてゐます。私は舟の首が岬に着いた時、三千年の昔  
 をそのままに見せてゐるのはここであると思ひました。ず



つと前の先祖の住んだ家は、この竹垣——ではない、枯れた藪垣で圍はれた、かうした家であつたらうと思ひました。

—大正女子國語讀本—

古代に於ける日鮮の關係 [自修文]

日本と朝鮮とは大昔から深い關係をもつてゐて、古く紀元以前に日本から渡海した人もあれば、朝鮮から日本へ渡つた人も少ない。天照大神の御弟の素戔鳴尊は、その御子五十猛神いだけののかみを連れて新羅へ渡り、木の苗を持歸つて、紀伊國やその外の内地に殖林した。中にも熊野附近が最も樹木に適したので、木の國といふ名もついたといふ。

次に向ふから日本へ來たものでは、新羅の王子と稱する天日槍あまのひやりといふのが一番古いと傳へられてゐる。これは素戔鳴尊の御子の

紀元以前  
神武天皇の御  
即位以前

殖林

木を植ゑて林  
をつくること

歸化  
日本の國の人  
民となること  
蕃殖  
ふゑること  
豪族  
勢力の強い家  
がら

(一)朝鮮人。  
(二)朝鮮半島のこ  
と。  
保護國  
護つてやつて  
ゐる國。

大國主神が、出雲地方を治めて居られた時に渡海して來て、その勢力に屈服し、遂に歸化して但馬に住居し、子孫蕃殖はんしよくして、その地の豪族となつた。神功皇后の御母方は天日槍の子孫である。故に神功皇后は征韓の上に御便宜を得られたことと見える。また大國主神が出雲地方を治めて居られた時に、朝鮮の南端を日本に引寄せたといふ傳説がある。即ち國來い。國來



神功皇后(中山神風筆)

い。といつて引寄せて、それを出雲に縫附けたといつてゐるが、實際は韓人(一)を多く日本へ移させて、植民した事實と見るのが至當であらう。

神功皇后の征服以後約四百五十年にわたつて、半島を保護國と



轉任  
更に他へ移住  
すること  
純朝鮮人  
全くの朝鮮人  
ほんたうな朝  
鮮人

してゐた間、雙方の往來交通は頻繁で、戦争もたびたびあり、平和な貿易も盛にあつたから、この四百五十年間、古代に於ける日本と朝鮮との密接關係のあつた時期で、當時日本では、土地の割合に人口が少かつたから、移民を歓迎したので、盛に朝鮮から移民を引寄せた。これ等の人々の中には、農民も職工もあつたらうが、機織を業としてゐたのが一番多かつた。絹織物がこの後日本に發達したのは、この移住民の力である。この人々は、もと支那人で朝鮮に移住し、それからまた日本へ轉住したものであるが、純朝鮮人の移住したのも少くはない。前後の移住民の統計がないからわからないが、ざつと四分の一はこれ等の移住民である。そしてこの人々は男女で移住したから、韓の婦人も當時澤山に來たであらう。また日本人で朝鮮に移住したのも少くないから、自然内地にも朝鮮にも、雜種の子が殖えたことはいふまでもない。今でも日本人中に朝鮮式の顔が多少あるのは、この系統を引いてゐるのであらう。

(一)第五十代

(二)第二十九代

(三)敵に捕へられた時、敵將が「日本王わがしりぞくべし」と呼ばしめようとする、反對に「新羅王わがしりをくらへ」と呼んで、終に殺された。第十五代。  
(四)支那の黃河流域に發達して來た人種。  
(五)大葉子は朝鮮の城の邊に立つて、故郷の日に本へ向かひ、頸巾をかけてゐるよとつて、意領巾を振つて、昔婦人が正装の時頸巾にかけた布飾と似た布。

蝦夷征伐で有名な坂上田麿や、その子の坂上田村麿なども歸化人で、しかも桓武天皇の大功臣となつたのである。それより古く欽明天皇の時に、新羅征伐に出て敗軍し、新羅に捕へられた時、敵の大將を罵つて殺されたといふ豪氣な調伊企儼といふ武人なども、先祖は應神天皇の時朝鮮から來た漢人種である。この時、伊企儼の妻の大葉子も捕虜となつたが、この大葉子を詠んだ歌に、  
韓國の城の邊に立ちて大葉子は  
領巾振らすもやまとへ向きて  
といふ有名な歌がある。この歌は、大葉子が夫と同じく敵の前でわ



(坂上田村麿) 谷口香橋筆



遙拜 はるかにをがむこと  
 最期 命の終、死  
 義烈 義心のすぐれてゐること  
 遠征 遠國を征伐すること  
 希有 ごく珍しいこと  
 (一)第三十四代舒明天皇の時の討つて蝦夷を討つて敗れ、逃れようとした時、妻に勵まされて奮起することを得た。  
 (二)大和薬師寺の僧、聖武天皇の時、諸國を巡つて、寺を建て、橋をかけ、などして大功があつた。  
 (三)續日本紀といふ書を作つた。

るびれもせず、城の上から日本の方を向いて領巾を振つて、最後の遙拜をした後、勇烈な最期を遂げたのを見て、日本人の感じて詠んだのである。この時伊企儼の子も父と共に戦死をした。夫婦親子うちそろうての義烈は、目覺しいことであるが、やはりこれも韓國人の血統である。



大山葉子 (作雲朝)

また當時は婦人も勇悍で、夫と共に従軍するものあつたことに注意せねばならぬ。獨り大葉子のみでなく、夫と共に遠征に従軍したのは希有なことではない。當時はこの外にも澤山例があつた。上毛野形名の妻などもその一人である。

また佛教で有名な行基菩薩も歸化人の血統であるし、建武中興の忠臣兒島高德も、本を尋ねればまた同様である。學者では菅野眞道も百濟人の血を分けたもの、周防の大名の大内氏なども、任那人の子孫であるから、朝鮮人でも長く日本の感化に浴すれば、立派な臣民となることは明らかな證據のあることである。

萩野由之の文による

二人。光仁、桓武  
 嵯峨天皇の弘  
 仁中葉の年七  
 十四

### 三 蟲の聲

沼波瓊音

生存  
 私は一年の中で秋が一番好きだ、なぜ生きてゐるか。どういふ目的で生きてゐるか」と問はれ、ば、秋を味はふのが生存の一つの目的だ」と答へるくらゐに、私は秋を好ましく思ふ。私が秋に對して感ずる心持はどうかといふに、荒立つた後にくる澄んだ心持である。悲しいとか、腹立たしいとか、感情が激しく動いた後に、非常に靜かな落着いた心持になる。その荒立つた感情の後にくる心持、それが秋の心持である。



荒ぶ  
發心す

風物

兵士が劇しい荒びた戦争に飽きて發心した心持にでも喩へようか。とにかく細かく、優しく、そして澄んだ感じである。かういふ心持は、秋の風物の何物にでも現れてゐる。物の形でいへば日光、月光、雲、草花など、それ等のものにもこの心持は著しく現れてゐる。句でいふと木の花、觸覺に感ずるものでは冷たい風、聽覺にくるものでは蟲の音、そのすべてに前に述べた秋の感じは現れてゐるが、殊に蟲の音に最も著しく現れてゐる。

耳に觸れるものでは、春はいろいろな小鳥が啼くし、夏の盛には蟬が鳴くけれども、蟬の聲は却つてうるさいものである。秋の蟲の音を聞く心持は、春の朧夜に鳴く蛙の聲を聞

卑俗

く心持にも比べられるが、蛙の聲は卑俗で、單調で、蟲の音ほど複雑な、優美な。そして細かな感じを起させない。その點に於て蟲の音は最優等で、前に述べた秋の感じなり味はひなりを、一番深く表してゐる。小鳥の聲だとか、蟬の聲だとかは、外的とでもいふのか、外に現れるやうな趣をもつてゐるが、蟲の音は内的である。蟲の音を聞くと、心の眼が内に向かつて開くやうな氣持がする。



蟲鳴く里 (川上泰生筆)



季題

蟲の音は俳句では秋の季題になつてゐるが、實際は土用の中から鳴き始める。それもいい。秋に入つて月夜に鳴くのもいい。闇夜に鳴くのもよく、また聞きながら眠に入るのもよく、夜中にふと目覺めて聞くのも趣がある。朝早く聞く、晴れた日の晝間聞く、雨の降る日に聞く、それぞれ違つた情趣と味はひとがあつて、いづれもいい。殊に夜汽車にでも乗つて行くと、或寂しい驛に着いて、ふと蟲の音を聞くことがある。旅の哀も一入覺えられて、深い味はひがある。また夜の銀座の明るい賑やかな通を歩いてゐて、ちよつと細い暗い路地に入ると、足下で蟲の音がしてゐる。趣が更に深い。それから秋每晚蟲の音を聞いて、それが冬の初になつて、今まで

情趣

寂寥

蟲の音に慣れてゐた耳に、全く何の音も入らないのに氣づくと、堪らなく寂寥を覺えるものである。 —しる椿—

四 鞍馬の火祭

志賀直哉

十月廿日過、私は二三人の友だちと、鞍馬へ火祭ひまつりといふのを見に行つた。日の暮京都を出て、北へ北へいくらか登りの道を三里ほど行くと、遠く山の峽かまがほんのり明るく、その邊一帶薄く烟の立ちこめてゐるのが眺められた。苔の香を嗅ぎながら、冷え冷えとした山氣を浴びて行くと、この奥にさういふ夜の祭のあることが不思議に感じられた。子供づれ、女づれの見物人が提燈をさげて行く。それを時々自動車が

山氣

(一)京都市(山城)愛宕郡、約三里の鞍馬方に、寺ありて、合祭に屬す。火祭は、神樂山、口祭は、神社あり、毎年十月十日、二日、は、深月祭に由りて行はれる。

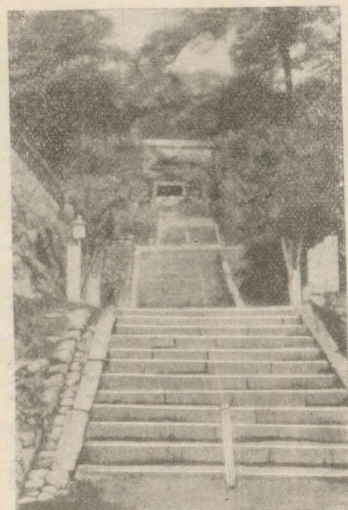


前の森や山の根に強い光を射つけながら追ひぬいて行く。山の方からは五位鷲が啼きながら飛んでくる。そして行くほどに、幽かなくすぶり臭い匂がして来た。

町では家毎軒前に、といつても通が狭いので道の真中を、一列に焚火が並んでゐた。大きな木の根や、人の背丈ほどある木切で三方から圍ひ、その中に燃えてゐるのが、何か岩間の火を見るやうな一種の感じを起させた。

焚火の町を出ぬけると、稍廣い場所に出た。幅廣い石段があつて、その上に丹塗にの大きな門があつた。廣場の両側は一杯の見物人で、その中を下帯一つに肩だけちよつとしたものを着て、手甲てつか、脚絆かか、草鞋がけに身を固めた向ふ鉢巻の若者

たちが、柴を束ねて藤蔓で巻いた大きな松明たいまつを擔いで、「最澄祭禮。」これはほんたうではないが、ちよつとさう聽きなされる掛聲をしながら、両足を踏張り、右へ左へよろけつゝ、



鞍馬寺山門

上手に中心を取つて歩いてゐる。或者はよろける風をして、わざと群集の前へ火を突きつけたり、或者は家の軒下にそれを擔ぎこんだりした。

火の燃方が弱くなり、自分の肩も苦しくなると、一抱ほどあるその松明を不意に肩から外し、どさりと勢よく地面へ投下す。同時に藤蔓がはぢけて柴は開き、火は非常な勢で燃上



る。若者は汗を拭き、息を入れてゐるが、今度はまた別の肩にそれを擔ぐ。それも一人ではとても上げられず、傍の人から助けてもらふのである。

この廣場を抜け、先の通へ入ると、そこにはもう焚火はなく、今の松明を擔いだ連中が、最澄祭禮と聞える掛聲をして、狭い所を行交ふ。子供は年相應な小さい松明を、わざと重さうによろけながら擔ぎ廻る。町全體が薄く烟り、氣持のいいぬくもりが感じられる。

星の多い澄みわたつた秋空の下で、かういふ火祭を見る心持は特別だつた。一筋の低い軒並の裏は、すぐ深い溪流になつてゐて、そして他方はまた高い山になつてゐるといふ

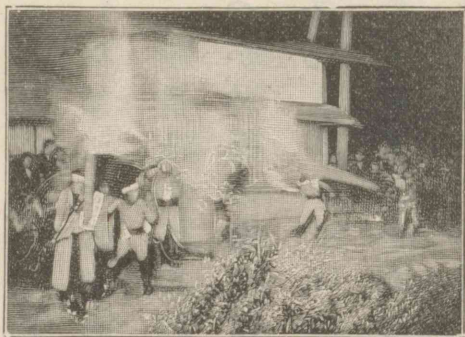
やうな所では、いくら賑はつてゐるといつても、その賑やかさの中には、山の夜の静けさが浸透つてゐた。これが都會のあの騒がしい祭より知らぬものには、大變よかつた。そして人々も一體に眞面目だつた。最澄祭禮。この掛聲の外には大聲を出すものもなく、酒に酔ひしれたものも見かけられなかつた。しかもそれはすべて男だけの祭である。

或所で裸體の男が軒下の小さい急流に坐つて、眼を閉ぢ、手を合はせ、長いこと何か口の中で唱へてゐた。清い冷たさうな水が、乳のあたりを波打ちながら流れてゐた。大きな定紋のついた變に暗い提燈を持つた女の兒と、無地の麻帷子かたびらを廣げて持つた女とが軒下に立つて、その男のあがるのを



待つてゐた。漸く唱言なげごとを終へると男は立つて、流の端にそろへてあつた下駄を穿いた。帷子を持つた女が濡れた體に黙つてそれを着せかけた。男は提燈を待たず、下駄を曳きずつて、すぐ暗い土間の中へはいつて行つた。これはこれから山の神輿を擔ぎに出る男だといふ。

かういふ連中が間もなく廣場の石段下に大勢集つた。そこには二本の太い竹に高く注連繩しづなづなが張りわたしてあつて、その注連繩を松明の火で焼切つてからでなければ、誰もその石段を登ることができないとのことだ。しかし、繩は三間よりもつと高い所にあつて、松明を立てても、その火はなかなかそこまでは届きさうにない。澤山の松明がその下に集



祭 火

められる。その邊一帶、火事の時のやうに明るく、一緒に早くその焼切れるのを仰向いて望んでゐる群集の顔を、赤く照らし出してゐた。

やがて漸く火が移り、繩が火の粉を散らしながら二つに分れ落ちると、眞先に抜刀を振りかざした男が、非常な勢で石段を驅登つて行つた。すぐ群集は叫聲をあげながらそれに續いた。しかし、山の門にもう一つ、それは低く、ちやうど人の丈よりちよつと高く、らるに第二の注連繩が張つてある。先に立つた抜刀の男は、刀を振りかざしたまゝ、



驅抜ける。注連繩は自然に切られる。そして群集は坂路を奥の院までそのまゝ、驅登るのである。

「どうだい、もう歸らうか。」と私は友を顧ていつた。

「御旅でやる御神樂を見て行かうよ。」

神樂といふのは、四五人で擔ぐやうな大きな松明をいくつか、神樂の囃子に合はせて、神輿のまはりを擔ぎ廻るのである。

「大概もうわかつたぢやないか。」

「何時だ。二時半か。」時計を見ながら友がいつた。

「これで京都へ歸ると、ちやうど夜が明けるかも知れませんよ。」と、もう一人の友がいつた。

焚火の町では、くる時岩間の火のやうに見えてゐたのが、今は盛に燃えてゐた。町を出ると、急に山らしい冷氣が感じられた。私たちは時々振返つて、明るい山の峽を見た。道は往きより近く思はれ、下りで樂でもあつたが、やはり皆はだんだん疲れて、無口になつた。

「睡くてかなはん。」と一人がいつた。

「僕が腕を組んで行つてあげるから、眠りながら行き給へ。」もう一人がさういつて、二人は腕を組んで歩いた。

京都へ入る頃は、實際友だちがいつたやうに、叡山の後からしらじらと明けて來た。



五 秋 晴

白鳥省吾

秋空晴れて

峠の路は露に濡れ、

漆の葉緋と燃えて、

あけびは熟し、

栗もこぼれる、

峠をおりるわたしたちに

添うて流れる谷間の水は、

深い樹立の奥にせゝらぎ、

ぶなの樹に猿が遊ぶ、

炭を負うてくる逞しい炭焼の女、

せゝらぎ

路を避けつゝ珍しげに、

山のかなたに反響する歌は、

先發の人々の聲か、

あゝ急がうよ、

秋の風さわやかに、

谷間の水も歌ひつゝ、

人里を慕ひゆく旅どころ。

六 秋の風物二三

中村武羅夫

一年四季の季節の中で、私は一番秋を好む。夏もいい。冬も  
いい。春もいい。青年時代には無頓着だつた季節季節の微妙



獨得

(一)北海道岩見澤町  
(二)東京市牛込區  
(三)神奈川県(相模國)鎌倉郡藤澤町辻堂海岸

な風物の移り變りに對しても、年と共にだんだん細かな氣持が動いて來て、氣のつかかなかつたやうな趣を見出して、一人微笑むやうなことがある。夏には夏の獨得な佳さがあるし、冬には冬の、春には春の、それぞれの趣と好ましさがあるのであるが、取分け私は秋の季節を好ましく思ふ。

私は北海道(一)に生まれて、二十歳過までそこで育つた。上京して十四五年(二)東京で生活して、今では相模の海村(三)に一家を舉げて移り住んでゐる。相模の國に住むやうになつてから、すでに七年許の月日が經つ。

東京で暮した十四五年の間こそ、まるきり自然に親しむ機會がなくて過したといつていい。僅かに貧しい庭の植木

や、草花や、町の燈火の色や、空の色などで、季節、季節の移り變りを味はふくらるに過ぎなかつた。が、その前後は可なり自然に親しんだ月日を送つて來てゐる。殊に北海道で生活した二十年の間は、北國の荒い自然の中に包まれて、その地に育つ木や草と同じやうに育つて來たといつても、必ずしも過言ではないと思ふ。

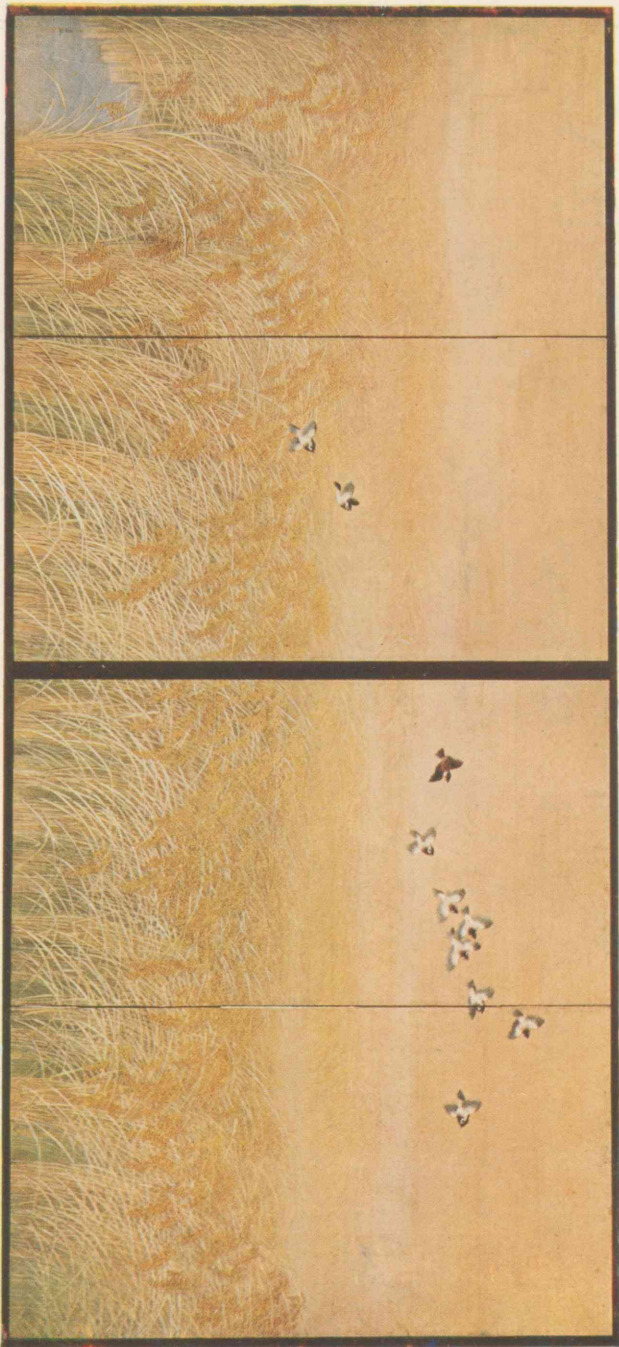
夏の短い北海道では、秋のくることが早い。土用半ばに秋風が吹くといふ言葉があるが、まだ夏の眞盛だと思つてゐるのに、もう吹く風が秋めいた寂しさを含んで、青々した色はしてゐても、水分の薄くなつたやうな木の葉や草の葉を、かさかさとして忍びやかな音を立てて渡るのである。そして土



用が過ぎて、残暑の暑さが暫く續いたと思ふと、自然はもうすつかり秋である。殊に北海道の山野には落葉樹が多いので、秋の歩みがはつきり感じられる。寒い一夜が明けたと思ふと、雪のやうな眞白な霜が降つて、一夜にして満目の黄葉紅葉である。あゝいふ壯快な秋の來方は、北海道にゐた時分以外味はつたことはない。

どんな小さい一本の木、どんな小さい一莖の草にも、秋には秋の趣が宿るのだからおもしろい。私は町といはず、野といはず、散歩することを餘り好まない。無意味に歩くことなんか殆ど絶対にないといつていい。が、秋になると、野道や、田圃路や、海岸などを、犬など連れて、黙々として歩くことがた

絶對



筆 秋 月 木 荒

か た ゆ



びたびある。路傍の枯れ枯れの雑草や芝草に、薄曇の寂しげな日影がしみじみと當つて、地面ではどこで鳴いてゐるのか、そこでも、ここでも、か細い蟲の聲が、しかも絶間もなしに鳴いてゐるのである。人の足音がするとふと鳴き止むが、通り過ぎたと思ふ間もなく、また鳴き始める。ほんたうにも静かな秋の聲を聞くやうな氣がして、可憐な、しみじみした氣がするのである。

田圃路など歩いてゐると、重さうに實のつた稻が深く穂を垂れて、黄金の波を打つてゐる。一年間の百姓の勞苦が、漸く報いられたのだと思ふと、何だか重さうに實のつた稻の、満ち溢れたやうな田圃に向かつて、手を合はせたいやうな



敬虔な氣持になつてくる。風に吹かれて緑の波を立てる夏の青田も爽かだが、米の實のつた黄金色の秋の田は、一層尊いやうな氣持がするのである。



(筆琴蕉田勝) 舌 百

かねてもどもぞしてゐると、不意に百舌の鋭い鳴聲の聞えることがある。すぐに蒲團を蹴つて、雨戸を繰つて外を見る

私は百舌の  
聲を好む。朝な  
ど早く目が覺  
めて、うそ寒い  
氣候に、蒲團の  
餘温から離れ

睥睨す

間色  
原色

と、一天鋼鐵の如く晴れわたつて、日はまだ出ないのに、椎の頂邊の枯枝か何かに、一羽の百舌が止つて、四方を睥睨しながら、劈くやうな鋭い聲で鳴いてゐるのである。身も、心も、思はず引緊るやうな氣がする。

海の色が濃くなり、山の色が美しくなるのも秋である。空氣の澄むせい、秋になると、青いものは愈、青く、白いものは愈、白く、赤いものは愈、赤く、間色といはず、原色といはず、すべての色が愈、鮮かに見えてくる。

私は相模の國に住むやうになつてから、始めて富士山の秀でた美しさ、崇高さを知ることができた。夏や春だと、せつかく秀麗な威容の全貌を見せたと思つてゐても、ちき雲に



隠れたりなどして、一日富士の姿を仰ぐやうなことは稀である。秋は幾日も幾日も、富士の全姿を見るやうなことが續く。けふの富士ときのふの富士とは違ふ。朝の富士と夕べの富士とは違ふ。光線と空氣との關係で、富士は時々刻々にその色彩を變化させ、随つて、或時は嚴かに、或時は優しく、或時は鋭く、或時は穩かである。

秋の富士と秋の海とを眺めるだけでも、私は相模の國に住んでゐる幸福を感じずる。

### 七 小さい旅人

薄田 泣菫

私たちが七つ八つの頃には、そろそろ秋が更けてくると、

吹きさらし

晴れきつた空を毎日のやうに雁が渡つた。私たちはそれを見かけると、吹きさらしの野路に立つて、空の一方を振仰ぎながら、

雁よ棹さかになれ。

棹さかになつたら鉤かぎになれ。

と、その長い行列が漸次に雲の中のにじみこんでしまふまで、聲を涸して叫んだものだ。が、いつの間にか雁も少なくなつて、今では晝間その長い列が空を渡ることは、よくよく人氣遠い野原かどこかでないと、めつたに見られなくなつた。

その頃はまた後の岡に行つて見ると、葉の落ちかゝつた雑木林に、小鳥が澤山來てゐるものだ。小鳥といふと、私は海



矮小

などを越えてくるあの小さい旅人の、あわたっしい旅を考へて、いつも、いはうやうのない寂しい旅心地を覚える。まづ百舌がくる。秋の彼岸が過ぎて、そろそろ日影が黄色がかつて来ようといふ頃、私たちはどうかすると、暖かい日の午過、そこらの木立で甲高い鋭いその聲を聞くことがある。あゝ、もう秋だな。と思はず振返つて見ると、矮小な櫟に雑つて、ずばぬけて背の高い榆トナリの木に百舌が一羽止つて、黄色い夕陽を受けて、羽が金のやうにきらきらしてゐるのが見える。私たちはその瞬間、いはうやうのない強い健かな氣持が胸に流れるのを覚える。

次にはひたきがくる。山家の午過、だるさうなきりぎりす



きたひ

の聲もいつの間にか止んで、枯葉一つ寝返を打つ音までがはつきりと耳に入る。静けさの底に、どこやらやつれた人の溜息とでもいつたやうな微かな聲が洩れて来て、何の音ともわからない。すると、樹蔭の萐トナリ畑かどこかで、餘念もなくせつせと仕事に精出してゐた農夫が、ひよいと顔を擧げる拍子に、すぐ鼻先の小枝から、枯葉のやうに小鳥がついと身をそらして、逃げて行つてしまふ。それがひたきだ。ひたきといつたら、まるで悲哀を抱いてゐる人のやうに、



大抵は連に離れて、たゞ一人で出てくる。そしてそこらの小枝に止るなり、何か眼に見えぬ昔馴染でも招くやうに、ひよくり、ひよくりと軽い御辭儀をして、さゝやくやうな聲で唄ひだす。私はそれを見ると、他の爲、世の中の爲といつたやうなわけでなく、自分一人の爲に唄つて、それで満足してゐる人たちを思ひ出さずにはゐられない。

ひたきが來てももの十日と経たぬ間に、四十雀がくる。この鳥はひたきと違つて、十羽も二十羽も群を組んでくる。山



雀 十 四

もんどり打つ

ませた身振

きやく

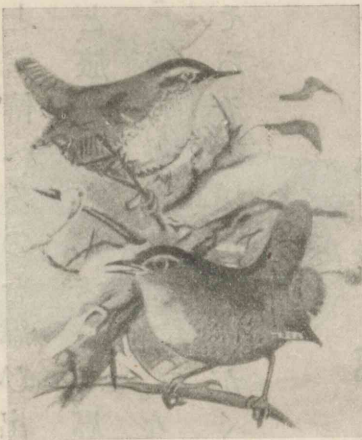
から里へ移るをりなどには、まるで時雨でもするやうに、細かい羽音がさつと空を掠めて聞える。そしてそこらの木立におりるなり、眩しいほどすばしこく、雀のたごなどを啄き廻しながら、鼠色の背をそらし、柔かみのある圓い胸を見せて、透徹つた銀の鈴を振るやうな聲で、早口にしゃべり續ける。で、かうした大層な群の中には、きつとまだ羽の伸びきらない灰色の産毛そのまゝの雛兒が雜つてゐて、どうかすると高い枝に止り損ねて、もんどり打つて宙に返ることもあるが、そこはまた馴れたもので、いきなりひよいと下枝につかまつて、ませた身振で、樹肌のひゞを啄いたりする。まるで山家育のすばしこい、きさくな魂そのものを見るやうな氣



持がする。

小雪がちらつく頃になると、みそさゝいがくる。これはひたきと同じやうに、大抵獨法師で、それもこつそりと附近を忍ぶやうにしてくる。冬の初の午過、山近い田舎の小家で、爺さんは火燵に潜りこんで、こくり、こくりと居眠をする。その側で婆さんはせつせと絲車を繰つてゐる。煤けた障子に檐に吊した干菜の影が見すぼらしく映つて、時をりちつぽけな小鳥の影がちらついたりする。どうかして絲目が切れて、睡さうな錘つづみの音がぱつたり止むと、こそこそと掛菜をむしる音がするが、老人の耳にそんな音の聴取れようはずがない。婆さんは俯うつむいたまゝ、また絲を紡ぎにかゝる。さうかうす

る間に、鳥は舌打をするやうな聲を立てながら、ひよい、ひよいと小刻みに籬を傳はつて、隣から隣へと、狭苦しい物蔭を



出たり入つたりして移つて行く

のだ。それがみそさゝいである。

みそさゝいと後先になつて頬

白がくる。冷たい雨のびしよびし

いと降る中を、獨者の頬白が灰色

の胸までぐしよぬれになつて、し

よんぼりとそこらの木に止つてゐるのを見ると、私の國でこの鳥の啼聲を解いて、

一筆啓上つかまつる。



子供泣かすな火の用心。  
 今度は便に金十両、  
 やりたいけれど、一文もござなく候。  
 と言傳へるのを思ひ出して、しみじみと世渡のむづかしさと、旅心の寂しさを思はずにはゐられない。  
 後の雑木林にこんな小鳥がくる頃になると、野にはもうそろそろ鶉が來、鳴ながくる。

八歌話

中村秋香

一 とりゐ坂

(一) 白河樂翁公、年十二にてなほ田安の邸におはせし頃麻布

(一) 松平越中守定  
 信。磐城國福  
 島縣。白河の  
 城主。後、老中  
 となつた。文  
 政十二年(一  
 四八九年) 卒  
 (二) 江戸城田安門  
 内

類焼す

落首



白河樂翁

鳥居坂なる戸川内膳の邸宅より火起り、その邊の町家類焼しけり。大火といふまでにもあらざりしかど、焼死せしもの多かりしかば、この火事は人の命をとりゐ坂これより上のとがはない。ぜんと落首せるものありけり。近侍の人興じ笑ひて、いかにもよく詠みたり。と評し合ひけるを、君聞き給ひて、余が詠まんにはさはいはじ。とありければ、奥醫師の某、さらば何とか詠ませ給ふ。と



すまふ

怪我

問ひまゐらするに、「いはじ。いはじ。」とすまひ給ふを、強ひて問ひまゐらせたりしかば、「四の句を『怪我のことなり』といふべきなり。」となり。

梅檀の二葉

一句のことにて一首の意味を全く顛倒せしめ、過のやみ難きに出づるを明らかにせられしこと、誠に「梅檀の二葉」とぞいふべき。

二 あがたの宿

(一) 櫻町天皇の御代、今より約百八十年前

狼藉たり

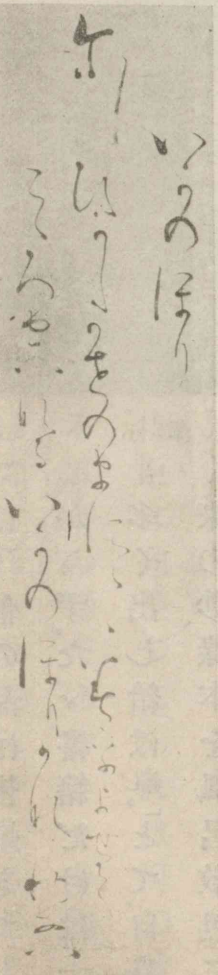
延享某の年の秋、江戸大風雨にて、市中とところどころの人、家破損しけるあけの日、賀茂眞淵翁の許へ、門人某見まひに行きけるに、翁の家も夜來の風にて、屋根大方吹きまくられ、日光席にさし入り、屋根板狼藉たる中に、翁は平常に異なる

沈思

さまもなく、机によりて沈思吟詠せり。烈しき風雨にも候ひしかな。といふ聲を聞き、始めて某の來れるを知りけん。顧て會釋しつゝ、餘談に及ばず、「この嵐にて一首出で來ぬ。」とて、書きて示しける歌、

野分

野分してあがたの宿はあれにけり  
月見に來よと誰にいはまし



蹟筆 香秋村中

いかにほり  
かせのまに  
まにみよ  
せてこころ  
のほりかな  
秋香

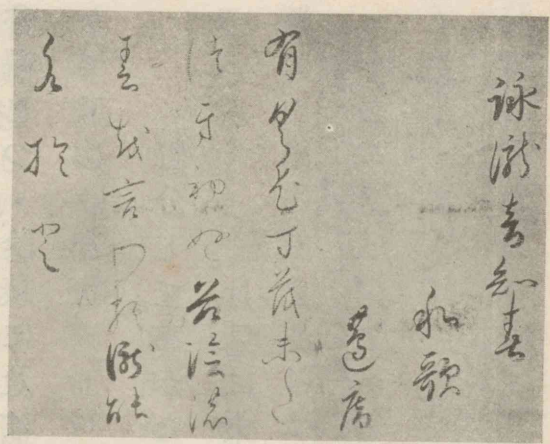
焼野の原



(一)光格天皇の御代。火災は天明八年(二四四八年)。(二)京都の歌人。享和元年(二四六一年)歿。年七十九。詠瀧音知春。和歌。うくひすも。またつけそ。め谷かけ。の春をこと。おと。の春をこと。おと。の春をこと。おと。

鈔録本  
(三)山城國(京都府)葛野郡

(一)天明の火災にて、小澤蘆庵が家危くなりし時、翁、人々に告げて、他の品は皆焼きても苦しからず。たゞ書籍だけは一冊も多く出し給はれ。とて、自身も年來の鈔録本を風呂敷包にし、これを負ひて、太秦なるしるべの家(三)に避けぬ。この火にて内裏の炎上せし由を聞き、いたく歎きて、翌日未明に太秦を出で、内裏の焼跡を拜し奉りて、



小澤蘆庵筆蹟

けさ見れば焼野の原となりけり

玉敷の庭

(一)Potsdam. ヘルリンから西南約七里。風光佳絶の地。  
(二)佛語(莫愁城)  
(三)Frederick. フレデリック世の詞(西曆一七四〇年—一七八六年)清楚

これやきのふの玉敷の庭——新説歌がたり——

九 フレデリック大王と酒井備後守

幣原坦

(一)ボツツダム(二)のサンスーシ宮は、フレデリック大王の記念に充ちてゐる。昔大王がここを居城としてゐた時のこと、清楚な境内の樹蔭濃やかな間に、ぎいぎいと音を立てて、静寂を破る音がした。大王は侍臣に向かつて「あれは何の音か」ときいて、宮門の向ふにある風車の響であることを知られた。そこで風車の持主に諭して、これを取去らせることになつた。



唯一の財産  
生計  
路頭に迷ふ

持主がいふに、この風車は私が祖先から傳へた唯一の財産で、一家はこれによつて漸く生計を立てて居ります。今これを取去られては、忽ち路頭に迷はねばなりません。それで



大王の機嫌を損ねた風車

も是非取去れとの仰ならば、一應公平な裁判を受けたいと思ひます。

侍臣は大いに腹を立てた。大王は笑ひながら、そのまゝにしておけ。とばかりで、一向

寛仁大度

咎めもなさらなかつた。當時の人はこれを聞いて、大王の寛仁大度に感じたといふ。これは有名な話で、今にその風車も

あながち

保存されてゐる。

しかし、あながちそのやうな話に、日本人は感心するほどのことはない。足下を見れば、それと同じやうな、なほそれよりも美はしい話が随分ある。責(せ)而者(は)艸(くさ)卷(まき)の十一(じゅういち)に、藩翰譜(はんかんと)を引いて、酒井忠利(さかゐ ちゆり)のことを述べて、左の如くにいつてある。

酒井備後守忠利の領内に、備後といふ百姓があつた。忠利の家來はその百姓を呼んでいふに、お前は、この領内に住んでゐながら、殿様と同じ名を冒してゐるのは不都合であるから、早速改名するがよい。百姓はこれを聞いて、歎いていふに、私は人よりも一層早く年貢を納め、月々の公役をばかりそめにも怠つたことはありません。さうして永くここに住

(一)岡本保孝の著  
保孝、號は況  
齋、明治十  
一年歿した。

名を冒す

年貢  
公役  
かりそめ



神妙の至

着きまして、代々備後と名のり、正直ものの備後で通つて居ります。今これを改名せよと仰せられましても、俄にはかなひません。何とか殿様の御名を改めていたゞくわけにはまゐりませんまいか。

家來は大いに腹を立てた。忠利これを聞いて、よしよし。年貢をよく納めて公役を怠らないのは、神妙の至である。さらば彼はその備後であるぞ。そのまゝで苦しうない。

徳川家康がこれを洩聞いて、世間の愚かな人は、何でもないことに人を苦しめて、己の威を立てようとし、無益なことに拘つて、有用な利を失ふものである。然るに忠利は天性和かにして、仁愛の情深く、智慧もまた少くない。彼の子孫は必

包容愛撫す  
符節を合す

稱揚す

宣傳  
顯彰す

ず繁榮するに相違なからう」と褒めたといふ。

この東西の二つの話は、事實こそ多少違ふけれども、寛仁大度の明君が、正直な民を包容愛撫する美はしさは、恰も符節を合するが如くである。フレデリック大王の事蹟は世界の人に稱揚されて、備後守の事蹟はこれを知らぬ人が多い。自分はフレデリック大王の宣傳の前に、備後守を世界に顯彰したいと思ふのである。

—世界の變遷を見る—

### 一〇 あぢ釣

もはや三時過でもあらうか、日は西にまはつて、海の上に白金の柱が横たはつた。良い時候だ。陸の方から北風がひや







しつるべおと

渺々

さうかうするうちに、笹の一葉と見えた舟は、次第に近く漕いで来て、私たちの舟から三四十間離れて、碇をおろして釣始めた。さよりを釣つてゐた舟も、一艘その側に寄つて来た。私たちも碇を上げて、舟をその方角に移した。

釣瓶落つりびんおとしといふ秋の日は、箱根の駒ヶ嶽の上に落掛つて、富士の頭ははや紫に染まつて来た。風はすつかり風いで、落日の影はゆらゆらと水の上に金を流してゐる。百舌も啼きやんで、陸の方に啞々と鳥の聲が聞え始めた。實に靜かな秋の夕だ。空高く海渺々として、風なく、波なく、夕日の光が獨りこの間に充ちてゐる。

忽ち、からん。私たちの一人が絲を掛けて置いた針金の鈴

潑刺

枚をふくむ

が一つ鳴つたかと思ふと、「からん。からん。りんりん。」と二つ三つ四つ續けざまに鳴つた。来たな、繰上げる絲の末を見ると、果して鶯茶の背に、銀色の腹をした、眼の大きな、口の透通つた五寸くらゐなやつが、潑刺とあがつて来た。と見るうちに、今度は自分の指先に掛けた絲がびくりしめた。絲を手繰ると重い。大きいぞ。それあがつた。またあぢだ。一尺はたつぶりあらう。さあ釣れだした。三艘の舟が三の字に並んで、餌をつける。はふりこむ。手繰る。所謂膚撓せず、目逃せず、枚をふくむといふ格で、はや蔭深く成行く水の上に伸びかゝつて、繰下し、引上げる。隣の舟でどぶんと鉛錘おもりをはふりこむ音。此方の舟で手繰る絲の舷側に軋る音。釣上げられた魚のはたば



た舟板の上に跳ねては、生簀の水にとびこむ音。  
「いや、こいつア大きい。早く、ちよつとその襤網を。」と、一人が遽しく叫ぶ。すくひ上げて見ると、なあんだ、めばるの大きいのだ。  
「とうとうか、つたな。」と、もう一人が胴の間で獨語するのを顧ると、黒鯛を釣上げてゐる。黒鯛先生先刻までは餌を繞つて、敢へて食はなかつたが、終に夕蔭になつて、眼が眩んだと見える。  
破れた沈黙はまたもとに復つて、また暫く釣つてゐると、大方葉山の寺で撞出したのであらう、暮の鐘が一つぼうんと海面に響いて來た。

Indigo.

(三)共に逗子町に在る。

「どうです、もうしまひませうかね。」と、一人が空を仰いだ。  
「さうですな。」と、飽足らぬ溜息一つ。眼を上げると、いつの間にか日は入つて、富士から相豆の連山は、入日のあとの卵色の空に、印度藍の波をうねらして、まだはつきりと輪郭を見せてゐるが、ついそこの葉山、逗子の山々は、すでに夕靄がかつた。手を洗ふ潮水はさながら温湯だ。しかし、海氣は冷えない。鯉舟の歸るのであらう、舟は見えぬが、えッしヨ、えッしヨ、えッしヨ。艦拍子が遙かに聞える。  
他の二艘も碇を上げて、一艘は小坪へ、一艘は新宿へ歸つて行く。私たちも道具を収めて、富士に見送られて、紫流す水



(一) 逗子町を流れる田越川

をゆるゆるに分けて行く。最早暮れた。海の上はまだ明るいが、行く方は濱も、松林も、人家も、夕餉の煙も、山も、茫とした一つの色に融合つて、たゞぼんやりとしてゐる。艚聲の絶間を、三聲、四聲高く雁が啼いて通つた。  
川口(一)近くなつて山の陰に入ると、驚いた、ぼらが跳ねては、眞黒な水に白く環を描く。  
火光(一)がちらちら見えだした。——徳富健次郎の文による——

### 一一 海の朝

潮の音遠し、明行く海。

なほ夜の名残にき霧はこめて、  
はひよる浦波砂を洗ふ。  
船歌かすか、夢に似たり。

#### 二

紫にほふ東の空、  
横雲忽ち眞紅に燃えて、  
見る見る太陽波を離る。  
神代のまゝの光たふと、

#### 三

金龍きんりゅうをどり、きらめく沖。  
早くも島々夢より覺めて、  
群立つかもめは風かぜに白し。  
命は溢る朝の海。

——高等小學讀本——



### 一二 雨の焚火

河井 醉茗

空は曇つてゐたけれども、朝早く起きる癖がついてゐるので、廣々とした庭の砂地を歩きながら、ふと焚火をして見ようと思つた。

木は松ばかりだから、秋といつても、落葉は松の枯落葉の外にない。黄色くなつた薄や、葦や、砂から出てゐた芝の根や、紅葉した小さい草などが少しばかり束ねてあるので、掃寄せた松葉と一緒にして、火を點けた。

(一) 神奈川県(相模)中郡(利根)大井町(阿)上にある(利根)神社(相模)一五三米海抜

大山の方から吹いてくるいさゝかな朝風に、砂丘の上の焚火はよく燃えた燃えたかと思ふと、白い煙は横に靡いて、

むら雨



(筆 郎 次 謙 口 野)

丘 砂

疎松の間から低い畑の上を越えて、遠く一町ほど先の向ふの松林の中まで、軽く流れて行くやうに見える。

をりから、はらはらと雨が降つて来た。

焚火は消えたり燃えたりしてゐる。降つて来ても内へ逃げこむほどの雨ではない。濡れるとも思はれないまばら雨が、空には音ある如く、砂地には何の音もなく、はらはらと降過ぎて行く。あゝ、秋のむら雨。私は長い間むら雨



音階的

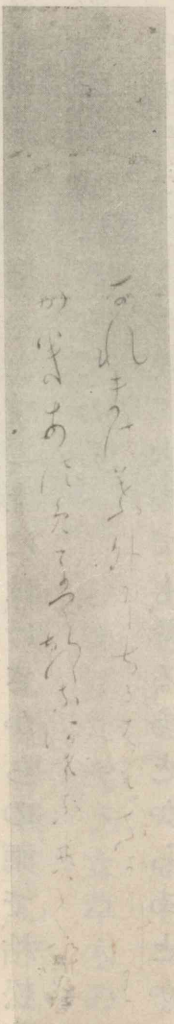
(一)大阪府(和泉國)堺市北旅籠町。  
(二)大阪市東成區住吉神社の祭神。

を忘れてゐた。

武藏野の雨と、相模野の海に窮るほとりに降る雨とでは、雨の調子が違つてゐる。東京の郊外に住んでゐて聞いた雨の音は、音階的ではなかつた。風が吹けば荒々しく、風がなければたゞ平凡に降續いた。<sup>(一)</sup>久しい昔海邊近くの故郷の町では、住吉の神が<sup>(二)</sup>出雲へ歸るのを送るといつて、百姓や漁夫たちが朝早くかの住吉詣の街道に續く頃、よくはらはらとむら雨が降つた。私は子供心に寂しさを感じた。

夏の雨では勿論ない。といつて、時雨のやうに寒さも伴はない。何となく暖かな砂丘の上に降る秋のむら雨。焚火のけぶり、柔かな松の風、相模野を吹いて來ても、海岸までくると、風は柔かになつてゐた。私はまた松の枯枝や松毬を拾つて來て、焚火の上にのせた。

かれちまつ葉  
外にちまつ葉  
もかきあつは  
りかきあつは  
あてはきあつは  
めなはきあつは  
あさなはきあつは  
酔焚火若く



蹟筆茗醉井河

○  
ここはむら雨ばかりではない、大きな雨も降る。そしてむら雨も、大きな雨も、夜半に降つて、朝はすつかり止んでゐることもある。また晝の間大きな雨が降つて、夕方に晴れることもある。この雨は降りだす時も、降りやむ時も、さつぱり

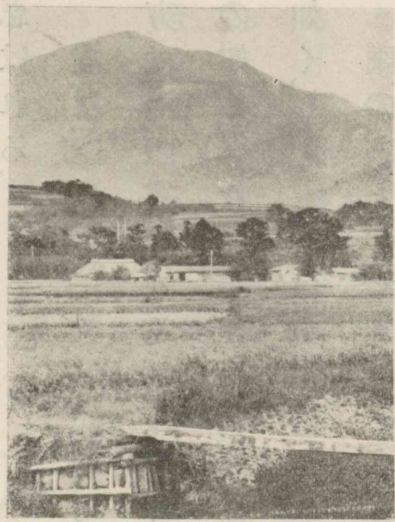


としてゐて、執着らしく續いてはゐない。止んだら全く止む。或日朝から大雨が降つてゐた。夕方ばかりと音が止んだので、外へ出て見ると、雨は綺麗に止んでゐた。空は晴模様になつてゐた。雨は今まで降つてゐたのだから、松の葉毎にしづくが露の珠を貫いて、歩くたびに露が落ちる。枯松葉が落ちる。きのふ掃いた枝の上には、けさからの雨で、枯松葉が敷いたやうに落ちてゐる。

砂地だから、どんなに大雨でも、降るあとからあとから浸みこんで、水溜りなどは少しもない。軒端から落ちる雨滴も、砂に跡を残してゐるばかり、あんな大雨はどこに降つたのやらと思ふほどだ。砂地はしつとりと水を含んで、落着いて

ゐる。

遠く近くまはりに斷續してゐる松林の色は、驚くほど爽



大山 (秦野町よ望む)

かになつてゐる。草の色も水を含んで、活々としてゐる。洗ひあげたやうな草木のみづみづしい呼吸、そしてその呼吸から空は清澄に、透明に、物として輝かざるはなく、現れ

ざるはなく、悦ばざるはない。

高い大山からだんだん左へ低くなつて行く山脈は、もう雨がすつかりあがつたといふやうな貌をして、薄青い山の



襪ひだが、薄墨の陰影を描いてゐる。山と雲との間のきつぱりと切れた空は、水色絹の目覚めるやうな光輝に透いて、彼方落日の秋には、どんな神々しい靈感が語られるであらうかと思はれる。

雲は空一杯に動いてゐるけれども、山の方は山の雲、海の方は海の雲、山なる雲は群り、高低に、重り動かうとするものの如く、海なる雲は横に、平淡に、一重に靡かうとするもの如く、しかも雲は次第にをさまつて行く。

雨のあとの清々しい香が漂うてくる。森のやうに濃くなく、山のやうに鋭くなく、淡々しい柔かな香氣が、松林の間から流れてくる。明るい香氣が流れてくる。

萬象

微かな波のとゞろきの外に、萬象何の響もなく、靜かに明るく暮れて行かうとする空に、松の梢に、陸の鳥とも海の鳥とも知らず、聞馴れない鳥の聲が聞える。彼方に、此方に、人間などが世界にゐようがゐまいが、何のか、はりもなく、雨晴れた空に快く、思ふがまゝに高い聲で、喜に満ちた聲で鳥は啼いてゐる。

— 生ける風景 —

一三 冬のくる頃

一 霜

島崎藤村

毎年十月の二十日といへば、初霜を見る。雑木林や平坦な耕地の多い武蔵野へくる冬、淺々とした感じの好い都會の

長野縣小諸の附近の景物を述べてゐる。平坦





(筆山靜浪岸) 頃るくの冬

霜、さういふものを見馴れてゐる人に、この山の上の霜を見  
 せたい。桑畑へ三度か四度も霜がく  
 る。桑の葉は忽ち縮みあがつて焼け  
 る。實際猛烈な冬の威力を示すもの  
 はあの霜だ。そこへ行くと、雪の方は  
 まだしも感じが柔かい。降積る雪は  
 寧ろ平和な感じを抱かせる。  
 十月末の或朝のことであつた。私  
 は家の裏口へ出て、深い秋雨に色づ  
 いた柿の葉が、おもしろいやうに地  
 にふるのを見た。肉の厚い柿の葉は、霜に焼け損はれたり、縮

れたりはしないが、朝日が當つて来て霜の緩む頃には、重さ  
 に堪へないで、脆く落ちる。暫く私はそこに立つて、茫然と眺  
 めてゐたくらゐだ。そしてその朝は殊に烈しい霜の來たこ  
 とを思つた。

千曲川のスケッチ

二 木 枯

長 塚 節

烈しい西風が、目に見えぬ大きな塊をごうつと打附けて  
 は、またごうつと打附けて、瘦せこけた落葉木の林を、一日苛  
 め通した。木の枝は時々ひゆうひゆうと悲痛な響を立てて  
 泣いた。短い冬の日はもう落ちかけて、黄色な光を放射しつ  
 つ瞬いた。さうして西風は、どうかすると、ぱつたり止んでし  
 まつたかと思ふほど靜かになつた。泥をちぎつて投げたや

茨城縣(常陸) 國一鬼怒川沿 岸附近の景情

悲痛



うな雲が、不規則に林の上にとじつとひつついてゐて、空はま  
だ騒がしいことを示してゐる。それでゐて時々思ひ出し  
たやうに、木の枝がざわざわと鳴る。世間が俄に心細くなつ  
た。

—土—

### 一四 藤樹先生

橘 南 谿

(一)儒者。名は原、世に近江聖人と稱する。慶安元年(一七二〇年)没。四十一歳。  
(二)近江國(滋賀縣)高島郡。今青柳村に屬する。  
(三)明の大儒。その風を望む。  
(四)京都の學者。元禄四年(一七二三年)没。七十三歳。

(一)中江藤樹先生は俗稱を與右衛門といひ、江州大溝在なる小川村の百姓の家に生まれき。學王陽明の流を汲みて、その德行一世に秀で、遠近皆その風を望まざるはなかりきといふ。

(四)熊澤蕃山は先生の門人なり。この人の先生に従ひし始を

尋ぬるに、おもしろき話あり。

その頃加賀の飛脚、金子二百兩を預り持ちて京へ上るに、江州河原市より馬を雇ひて、榎木の宿に至りて泊りぬ。馬方

河原市に歸りて、馬を洗はんと鞍を解

きつれば、財布一つ出でたり。取上げて

見れば、金二百兩あり。大いに驚き、急ぎ

榎木に行きて、かの飛脚の宿れる家に

至り、對面して委しく尋ね問ふに、その

人の忘れしものに相違なければ、これを返しけり。飛脚は死したるものの蘇りたる心地して、行李より別の金子十五兩を取出して馬方に與へ、若しこの二百兩なくば、我が生命を



中江藤樹

飛脚  
(一)高島郡  
(二)滋賀郡

蘇る







無理非道

つくすべし、主人は大切にすべきものなり、人のものは取らぬものなり、無理非道は行ふべからずなどいふこと、常に語り給ふにより、けふの金子も我がものにあらざれば、取るべき理なしと心得しまでのことなり。」と言捨てて、歸りぬ。

辛き命

飛脚はそれより京へ上りて、いつもの宿に至り、さてもこのたびは辛き命生延びて、各方にも對面することを得たりとて、ありし次第を委しく語りけり。

隨從

蕃山をりふし田舎より上りゐて、學問修業の最中なりしが、この物語を聞きて、その人こそ眞の儒といふものなれとて、翌日すぐに江州に行きて、小川村に藤樹先生を尋ねて、隨從を願ひたるに、「人に教へ申すほどの學徳なし。」とて、更に許

(一) 岡山の城主池田光政。



熊澤蕃山

し給はず、蕃山ひたすらに願ひて、二日が間先生の門に佇みて歸らず、先生の老母これを氣の毒がり、ともかくも内に入れ申せよ。」とあるに、いなみ難くて内に入れ、遂に師弟の契約をせられけりとぞ。

その後、先生を備前侯の招き給へる時、その身は病身なりとて固く辭し、門人に熊澤といふものあり、御役にも立つべきものなり。」とて、蕃山を出されけり。いづれも格別のことなり。

—「東遊記」による—



最も偉大な豪傑 [自修文]

第一段 (金曜日、學校の教場)

校長、今度の月曜日の宿題を上げます。「最も偉大な豪傑」といふ題です。これまでに讀んだ書物の中で、一番えらいと思ふ豪傑の例をお舉げなさい。」 學生吉田、友だちに聞いてもようございますか。それとも自分で考へ出すのですか。」 校長、自分で考へ出すといふことにしたい。」 學生逸見、本を見てもいいんでせう。」 校長、本は宜しい。課題を調べるに参考になるやうな本は、何でも見て宜しい。ちやうど鈴が鳴つた。課業をしまひます。」

(校長退出)

學生倉木、天下第一の豪傑は誰だらう。僕には當てられない。」 學生入江、「君當てるのぢやない。考へるのだよ。」 學生城、そんなにむづかしくはない。僕はもうわかつた。」 吉田、先生のいはれたことが、僕等の考へてゐる通りなら僕にもわかつてゐるんだが、先生が題をお出しに

なつた時、妙な笑顔をなさつたから、僕等が考へてゐるのよりも、もっと深い意味があるらしい。」 倉木、とにかく、歸つてゆつくり考へよう。」

(一同退出)

第二段 (月曜日の朝、學校の門前)

逸見、入江君、君豪傑を考へ出したか。」 入江、考へ出したとも。少し考へてすぐわかつた。」 逸見、さうか、みんなどうしたらう。さあ急いで行かないと、時間に後れる。」

(吉田、倉木、城来る)

入江、やあ、皆來た。諸君お早う。」 城、入江君、豪傑はわかつたか。」 入江、胸のポケットを叩いて見せ、「大丈夫。ちやんとここにしまつてある。」 倉木、そのポケットに入る豪傑なら、鉛筆のやうな小さなのだらう。」 入江、それでも君のより大きいかも知れないよ。」 吉田、さうだ、入江君の言最も理あり。袋が大きいからといつて、中味がよいとは限らない。」



(校長来る)

逸見やあ、丸井校長だ。一同先生、お早うございます。校長、豪傑を選んで來ましたか。一同はい、皆調べて來ました。

(一同退出)

第三段 (教場生徒着席)

校長、さあ、どういふのが眞の豪傑か、一人一人に尋ねて、選んだ豪傑の名を聞くことにします。城、一番にお答へなさい。城、私は豪傑といふものは、非常な伎倆をもつてゐて、何人をも恐れず、あらゆる敵にうち勝つものだと思ひます。校長なるほど尤もだ、だが、まだ何かおとしてはゐませんか。城、先生、この上にどういふ資格があるか、考へられません。校長、宜しい、外の人に聞いて見よう。しかし、お前の豪傑の標本は誰ですか。城、豊臣秀吉です。校長、えらい人を選びましたな。しかし私は、秀吉には豪傑たるものの具へて欲しいと思ふ、或資格が缺けてゐるやうに思ふ。今度は倉木、お前の豪傑

伎倆  
はたらき  
う

の定義をいつて御覽。倉木、先生、私は豪傑といふものは、あながち偉い大將に限らぬと思ひます。寛仁大度で、よく人の過を恕し、それと同時に、志が堅固で物に驚かず、己の生命よりも社會同胞を愛する人でなくてはならぬと思ひます。私は中江藤樹先生を選びました。

校長、大層おもしろい。倉木の定義はよほどおもしろい。また選んだ人物も立派だ。ところで逸見は。逸見、私は源頼朝を選んで見ました。しかし、頼朝は平家を滅して父の仇を報い、六十餘州の人民を驕る平家の暴政から救ひ出したが、これと同時に、利己心の爲に奔走したやうに思はれるから、或は眞の豪傑とはいはれぬかも知れません。尤も倉木君の説を聞くまでは、それに氣が付きませんでした。校長、逸見のそこに氣の附いたのは至極宜しい。頼朝の兵を擧げた動機は、國家生民の爲、平家の虐政を除く爲であつたとは思はれぬ。その志を得て後の行を見ても、博愛などいふ高尚な事を理想

利己心の爲に  
奔走す  
自分の慾望を  
満足させたい  
心から何かと  
骨を折る

生民  
人民



昌平  
國が榮えて世  
が平なこと

(一)支那の春秋  
時代の聖人  
名は丘、字は  
仲尼、周の敬  
王の四十七年  
(西曆前四七  
九年)歿、年七  
十九

としてゐたらしくもない……入江、お前の豪傑は。入江先生、私も豊  
太閣を選びましたが、今皆さんの説を聽いて、間違がわかりました  
から、徳川家康にします。家康は智もあり、勇もあり、寛仁大度で、慈悲  
深く、天下を太平に治め、民を安穩幸福にすることに努めて、遂に三  
百年間無事昌平の代を作りました。

校長宜しい。入江、お前が秀吉に代へて家康を選んだのは賛成だ。  
さあ吉田、お前の意見は。吉田先生、私は一所懸命古代の豪傑を調  
べて見ましたが、満足を得ませんでした。まあ孔子のやうな人が眞  
の豪傑に近いかと思ひます。孔子は最も深く善悪の別を辨へ、これ  
によつて天下億兆の民を、人の人たる正道に導かうとしましたが、  
亂世で用ひられなかつたから、遂に弟子を集め、書を著して、その道  
を百世に傳へました。かういふのでなければ、眞の豪傑とはいはれ  
ぬと思ひます。校長、吉田の考が一番大きい。まづけふの優等の答  
案です。これに次いで倉木、入江だ。なるべく廣く社會人類の幸福

を増進せしめた人が一番えらいのです。しかし、さういふ立派な事  
をするには、いろいろな困難があつて、並大抵ではできぬが、就中一  
番の困難は、自分のわがま、に克つといふ事である。孔子も『己に克  
つは仁の本。』といつて居られる。或場合にはわがま、どころか、大



孔子を大成孔子を  
以前既無孔子  
孔子以後史無孔子を  
大成孔子

江藤樹筆孔子

切な我が命を棄  
てても、社會國家  
の爲につくさね  
ばならぬことも  
ある。『殺身成仁。』

といひ、『獻身犠牲。』といふのはこれです。『己に克つものは眞の豪傑  
なり。』といふ西洋の格言を覺えていたゞきたい。他人に勝つよりも、  
まづ自分のわがま、私慾に克たなければ、眞の豪傑とはいはれな  
い。

(一同退出)



(France)  
(佛蘭西)

一五 三都氣質 その一

鶴見祐輔

(一) フランス人は勤勉な國民である。イギリス人も勤勉な國民である。しかし、その勤勉さには相違があるやうに思はれる。勤勉それ自身に本來の差があるわけではないけれども、英佛人の勤勉性の差は、單に外形上、形式上の相違だけには止らぬやうである。それは両國民の國民性の相違から生ずるのではあるまいか。然らばその國民性はいかに相違してゐるだらうか。こんなことを考へながら、私は一人でよくパリの公園を歩いてゐた。そしてこれにアメリカを今一つ加へて、よく三國の國民性を比較して見た。

(America)  
(亞米利加)

躍動す

象徴す

三國の特色は、その國の大都會に於て著しく眼に着く。都會はその國の國民性を最も鮮かに映し出してゐるからである。多くの人は、ニューヨークは餘りに歐洲化してゐるといふ。しかし、ニューヨークに一日ゐると、我々はアメリカの大空氣が全身に躍動するのを意識せずにはゐられない。ニューヨークはやはり米國である。そしてロンドンには英國であり、パリは佛國である。恰も東京が日本であるやうに。話はまた英佛人の勤勉性に還る。朝早くパリの街を歩くと、石の舗道の上には、もう綺麗に打水がしてある。凱旋門のあたりの廣場には、花賣の露臺がいくつともなく立並んで、新聞賣の小舎と共に、心地よい朝の活動を象徴してゐる。黒



〔Africa  
亞弗利加〕



い質素な着物を着た女たちが、耳に快いフランス語で笑ひ  
 興じながら、忙しげに花に水を注い  
 だりなどしてゐる。  
 ロンドンの下町に晝頃行くと、狭  
 い側道の上に、商館や銀行などの書  
 記かと思える若者が、帽子も冠らず  
 に、何百人となく忙しげに往來して  
 ゐる。私はこの群の中を縫ふやうに  
 して歩きながら、遠いアフリカや印  
 度の貿易を机の上でやつてゐるこ  
 の人々の日常生活を考へた。そしてフランス人とは種類の

脳裡に閃く

違ふこの人々の勤勉さをも考へた。こんな時には、いつもフ  
 ランスの或小説家の言葉が脳裡に閃いた。佛國人は蜜蜂の  
 やうに勤勉に、英國人は蟻のやうに精勵である。と、パリとロ  
 ンドンとの生活を見てゐるうちに、この言葉の深い意味が、  
 日一日と自分の頭腦に深く染みて行つた。晴れわたつた初  
 夏の日盛に、寸刻の休もなく、花から花へ蜜を求めて翔つて  
 行く可憐な蜜蜂の勤勉が、いかにもよく佛國人の心持を表  
 して居り、來るべき冬の準備の爲、營々として重い餌を引摺  
 つて行く健氣な蟻の精根が、いかにもよく英國人の勤勉を  
 表してゐるやうに思はれた。

それならば、米國人のあのいらした忙しさは、何に喩

精根



阿鼻叫喚

へられようかと考へて見た。私の頭の中に、ふと淺草の觀音堂の鳩が浮かんで來た。いつ行つて見ても、大勢の人込の中で、幾十百羽の鳩が我劣らじと押合ひ壓合ひ、地上の豆を拾つてゐる。物音に脅されて飛立たうと、半分氣を外に配りながら、それでも眼前の豆粒は一つでも餘計に食べようと、眼の色を變へていつまでも餌を拾つてゐる。米國人の勤勉は正にこの鳩のやうに餘裕がないと、私には考へられた。

朝の出勤時間頃にニューヨークの地下鐵道に乗る人々は、これがこの世ながらの阿鼻叫喚ではないかと思はれるやうな雜沓を目撃する。或日、私は汽車の切符を買ひに市内營業所に行つた。大勢の客が群集してゐた。係の若い米國人

が、私の行先と乗るべき列車とを聽取り、やがて右手の袖をちよつと捲り上げて、鉛筆持つその手を、切符の紙の上で左右に五六回激しく振つた。何をするのかと呆氣にとられて見てゐると、忽ちくわつと手を紙の上に落して、するすると切符の文字を眼の廻るやうな早さで書終へた。たゞ今手を振つたのは、結局手に運轉をつける爲だつた。私は噴出すやうなをかしさを感じた。何もさう手に運轉をつけないでも、大



ニユーヨークの市中



して時間に相違もなく字が書けようし、また運轉をつける時間だけ無益のやうな氣がした。

### 一六 三都氣質 その二

その翌年、私は英國の商務院の鐵道局に、賃金の一覽表をもらひに行つた。すると係の若い英國紳士が、たしかこの机の中に一枚だけ統計表を入れて置いたはずだ。といつて、自分の机の引出をあけた。私は見るともなくその中をのぞきこんで見て、驚いた。まあ、何といふ多數の書類だらう。累々と種々な紙片が堆積されてある。それを件の若い紳士は、手を突つこんで、がさがさと搔廻して、「ここにはない。」といつて、次

堆積す

[Typist

の引出、またその次の引出をあけ、そして最後の引出の底から、やつと見つけ出した。これは差上げるわけにいかないから、ここで見て下さい。」といふから、「一度見ただけでは、とても覺えられませんね。」と答へると、ちよつと當惑して、「それでは私が寫して上げませう。」といつて、それを別な白紙に筆寫し始めた。ニューヨークならば、傍にゐる若い女のタイピストに命じて、一分間に寫させるところだが、件の若い紳士は、まづ自分の机の上の大きな吸取紙の上に、原本の統計表を置いて、その上に白紙を當てて書きだした。私はちよつと面食つた形で、この異様な淨書法を見てゐた。すると、彼は白紙の上に數字を一行書いた。そして今度はその白紙を左手で持



上げて下の原本をのぞいて、次の行の數字を暗記して、また白紙をその上にべたりと置いて、暗記しただけ書いて、また前のやうに紙を持上げて原本をのぞいて、またその上に重ねて書いた。不思議な遣方だと見てゐると、やがて書終へた。インキが乾いてゐない。そこで、今度はその紙と原本と二枚持上げて、下敷になつてゐる吸取紙の上に裏向に置いて、丁寧<sup>ニ</sup>にインキを拭取つて、さて私にその淨書したのをくれた。ニューヨークから着いたばかりの私は、全く呆氣にとられて、ここを出て行つた。そして幾回となく鉛筆持つ手を振つて運轉をつけて、猛烈な勢で切符の文字を書いた米國人と較べて考へて見た。



パ リ (アポ・ブ・ロー・ニユ)

その春、パリの郵便局に書留小包を出しに行つた。馴れない私は、誤つて受取人欄へ自分の住所姓名、差出人の欄へ先方の住所姓名を書いた。これを局の小窓から差出す時、私はふと氣づいて、「おや」といふと、局員の佛國人がつとペンを取つて、受取人といふ字を抹消して差出人と書き、差出人といふ字を抹消して受取人と書いた。なるほどこれで送票は完成したわけである。しかもそれがほんの一瞬間だつた。私は全



く感服してしまつた。そしてニューヨークの切符賣と、ロンドン  
の役人と、パリの郵便局員とを頭の中で列べて見た。鳩  
と、蟻と、蜜蜂と。

—三都物語—

### 一七 快活

下田次郎

人の一生には時に運不運あるを免れず。不運なりとて泣  
きるても、運の神は氣の毒がりもせず。笑ひたりとて、税のか  
かるものにあらねば、なるべくは笑つて暮したきものなり。  
何不自由なく暮して、他人より羨まるゝはずの身にてあり  
ながら、いつも苦蟲を嚙潰したる如き顔付をなせる人あり。  
「何が氣に入らぬか。」と聞けば、「人の笑ふが氣に入らぬ。」とか。さ

(一)胸腔と腹腔と  
の境をなし、  
呼吸運動に主  
要な筋肉。

らば己も笑へばよきに、さてさて損なる人かな。これに反し  
て、いつ出遇ひてもにこにここと、嬉しさうな顔付をなせる人  
あり。本人は勿論、こなたまでも氣分よく、御酒をあげて祭ら  
ずとも、本人即ち福の神なり。他人に金品を恵むばかりが慈  
善にあらず。愉快なる顔して、向ふの人までも愉快にするは、  
これまた大なる慈善にあらずや。草木も日光に當てざれば  
花は咲かず。快活は人生の日光なり。笑は肺と横隔膜(一)とを運  
動せしめ、肝臓、胃その他の内臓に振動を與へ、心臓の鼓動を  
進め、呼吸を増し、血行、分泌を良くして、衛生上甚だ有益なり。  
西諺にも「笑へば肥える。」とあり。とかく陽氣なるがよし。  
快活ならざる人は、バネなき車の石道を行くが如く、頭に



了簡  
笑止

響きて堪難し。世にはすでに十分の心配を控へながら、なほ心配を捜し歩きゐるかと思はるゝ人あり。蟹の如く不平の泡を吹きゐる人あり。螻蛄の怒れるが如く、年中青筋を立てゐる人あり。何たる了簡にや、笑止の至なり。仕事は人を殺さず、屈託こそ人を殺すなれ。餘計なる心配することなかれ。いらぬ心配するだけが損なり。ニユーヨークには「笑醫者」の名を取れる醫師ありき。病人に接するに、いかにも幸福なる顔をして笑みかたむくる故、病人にもその機嫌移りて、薬よりこの方が能く利きたりといふ。

(Franklin.  
アメリカの政治家、學者。  
一七九〇年—一七九〇年)

フランクリンは快活なる一人の職工について記していはく、「余の仕事場の近所に、いつも愉快さうなる顔をなし、誰

秘訣

とも深切なる言葉をかはし、天氣の如何を問はず、嘗て變れることなき職工ありき。或朝出遇ひし時、その上機嫌の秘訣を問ひしに、答へていはく、「別に秘訣とはなければど、たゞ余は最良なる一人の婦人を妻とせり。余の仕事に出掛くる時は常に激勵の言葉を與へ、歸りくる時は笑顔を以て迎へ、茶は必ず用意し、また何等かの食物をこしらへ置きて、一日の勞を慰めくるゝが故に、人に向かつて不深切なる言葉を出さんとするも、出すべきことなし。」といへり。とかゝる妻をもちたる人は實に仕合なるかな。

世界は快活なる人の所有なり。くよくよ思ふは損なれば、何事にもさつぱりと陽氣に暮すがよし。日は誰の顔にも照



り、花は何人の眺にも任すにあらずや。

### 一八 細川幽齋と太田道灌

(一)應仁元年(二)川勝元年(三)細川宗全との京都に於ける戦に委す

(一)名は藤孝。慶長十五年(二)年七十七。築いて江戸城を築いた。文明四十八年(一)五十六年(一)五十五年。長門干戈の間

應仁の大亂以後、北は陸奥より、南は筑紫の端まで、世は刈薦の亂れ亂れて、いつ治るべしとも見えぬ。文藝の花は地に委して、大方顧るものもなかりしが、身は武門に生まれながら、優しくもその花の種を拾ひて、おのが城郭に培ひける人あり。細川幽齋、太田道灌の如きこれなり。

細川幽齋は足利の長臣たる細川の名門に生まれ、十四歳の初陣よりこの方、干戈の間にのみ奔走したりしが、或日の戦に敵將を追ひつめたるに、敵は早くも馬を棄てて逃れた

息をもつが

思ひよそふ



齋 幽 川 細

り。幽齋もはや尋ねんにせんなし。引返さん。といふを、從卒暫しとて、件の馬をあらため、敵未だ遠からず、早く追掛け給へ。とて、主の轡を執りて、息をもつがず、驅出で、やがてかの敵を見つけて、打取らせたり。

幽齋從卒に向かひ、何を以て敵の遠からざるを知り得しぞ。と問ふ。從卒答へて、古歌に「君はまだ遠くは行かじ我が袖の、袂の涙乾きはてねば。」と詠めり。さきに馬の鞍未だ温かなりしかば、右の歌に思ひよそへて、その遠からざるを知りたり。といふ。幽齋手を拍ち



て、さてさて今の世に無用と思ひし和歌の道にも、さやうの徳はありけるよ。とて、これより師につきて、ひたすら和歌の道にいそしみぬ。

霞山添氣色  
山ひめのか  
さしめさく  
らまたさよ  
りおもかけ  
すほふ朝か  
みかな  
齋



細川幽齋筆蹟

太田道灌がこの道に志ししにも、またこれと相似たる話あり。道灌は初め左衛門大夫持資とて、關東の管領上杉が臣にて、幼時より大膽にして、人を人とも思はず、武道をのみ好みて、末恐しと稱せられしが、血氣の頃鷹狩に出で、雨に遭ひて民家に入り、蓑を借らんといふに、主の少女何とも答へず

末恐し  
血氣の頃

して、山吹の花一枝を差出せり。持資心得ず、そのまゝに歸り



山吹 (筆方美崎柴)

しが、後或人の「それは七重八重花は咲けども山吹のみの一つだになきぞ悲しき」といふ古歌の心なるべし。といふを聞きて、持資始めて風流の趣味あるを解し、それより和歌文學に志を寄せたり。

後義政(一)に見えんとて京に上りしをり、後土御門天皇勅して、武藏野の有様を問はせ給ふ。道灌歌を以て答へ奉る。露おかぬ方もありけり夕立の、空よ

(一)足利第六代將軍。延徳二年(一五〇年)歿。年五十六。  
(二)第百三代。



叙感

り廣き武藏野の原。と。また隅田川の都鳥を問はせ給ふに、年  
ふれど我がまだ知らぬ都鳥、隅田川原に宿はあれども。さら  
ば汝が館の風景はとありければ、我が庵は松原つゞき海近  
く、富士の高嶺を軒端にぞ見る。と答へ申ししかば、叡感淺か  
らず、御製を下し給ふ。

武藏野はかるかやのみと思ひしに

かゝることばの花もさくかな

ことばの花

一九 風の古里

濱田 廣分

闇に立つ山、並ぶ山、

ながるゝ川も闇の川、

ひと夜の汽車にゆられつゝ、

歸り來りぬ古里に。

刈田に人の影もなく、

名なし小草は霜枯れて、

音ながらの野のながめ、

荒れてはあれど古里よ。

風の吹く日を野に立てば、

あゝ、山のこゑ、父のこゑ、

目をし閉ぢつゝなほ聞けば、

あゝ、森のこゑ、母のこゑ、

はげしきなかに勇ましや、



村の童は女あらべも、  
髪ふりみだし駆けりつゝ、  
昔のまゝに風を追ふ。

三人の時計〔自修文〕

甲、乙、丙の三人が或所へ行かうと思つて、その時間を相談しまし  
た。

「二時半の汽車にしよう。」と甲がいひました。

「宜しい。しかし、今は何時だらう。」と乙がいひました。

「一時十分前だ。」と自分の時計を出して見て、丙がいひました。

「君の時計は合つてゐるのか。」と乙が聞きました。

「あゝ、僕の時計は正しい。ドンに合はせたのだから。」と丙が答へま  
した。

「いつ合はせたのだ。」と甲が聞きました。

「三日前だ。」と丙が答へました。

「それでも君の時計が後れる質なら君の時計はもう正しくはな  
いだらう。」と乙がいひました。

「そんなことはない。僕は僕の時計を信ずる。」

丙はまたきつぱりかう答へたあとで、甲に聞きました。

「君の時計は何時だ。」

「一時十分過だ。」

「随分進んでゐるね。」と丙が笑ひました。

「あゝ、僕の時計はあてにならない。」と甲がいひました。

「それでも君は君の時計をいつドンに合はせたのだ。」と乙が甲に  
聞きました。

「きのふだ。」と甲が答へました。

「きのふ。そんなら二三日前にドンに合はせた丙の時計よりは、あ  
てになるかも知れないぢやないか。」



「うん。しかし、僕には僕の時計は信じられない。何だか違つてゐるさうな氣がする。」と甲が俯うつむいて答へました。

「そんなあてにならない時計を持つてゐても、し方がないぢやないか。」と丙が罵つていひました。

「君のが合つてゐるなら、君の時計に合はせよう。」甲はかういつて、自分の時計を丙の時計に合はせました。

「君の時計は何時だ。」丙はまた乙に聞きました。

「かつきり一時だ。」

「いつドンに合はせたのだ。」

「をととひだ。」と答へました。

「やはり進む質だね。」

「いいや、僕の時計はどちらかといふと、少し後れる質なのだ。だから多分今は一時五分過くらゐだらう。」と乙がいひました。

「そんなことがあるものか。それは違つてゐるよ。」と丙が笑つてい

ひました。

「うん、少しは違つてゐるかも知れない。しかし、大した違ひはないはずだ。ここから停車場までは、どのくらゐかゝるだらう。」

「二十分あれば十分だ。だからまだゆつくりしてゐていい。」と丙がいひました。

「しかし、今が一時五分過とすれば、あと二十分しかないのだから、僕は一足先に出かけるよ。停車場でいづれ會はう。」

乙はかういつて、出て行きました。

「氣の早い奴だ。」

丙と甲とはかういつて笑ひました。

しかし、それから暫く經つて、甲と丙とが停車場へ行つた時、乙は二人にいひました。

「汽車はもう出てしまつた。僕は間に合つたのだが、君たちを待つてゐたのだ。」



甲と乙とは驚いて、顔を見合はせました。

「それでは僕の時計は違つてゐたのかな」と、丙が顔を赤くしていひました。

「さうだ。君の時計は二十分後れてゐたのだ。僕の時計は十分後れてゐた。甲の時計が合つてゐたのだ。」

「さうかなあ。」と甲がぼんやりしていひました。

「して見ると、君が一番利口だつたわけだね。」

「さうだ。自分を知つてゐるものが一番利口だ。時計は信ずる爲に在るものだ。信じなければ、それは何の役にも立ちはしない。間違つた時計を持つてゐて、それを信ずるのはもとより悪いが、またどんな正しい時計を持つてゐても、それを信じなければ間違つた時計を持つてゐると同じことだ。また何も持たないのと同じことだ。間違つた時計を信ずるものも、正しい時計を信じないものも、共に汽車に乗ることができない。それは両方ともばかであるからだ。自分

(一)文士。東京の人。

を知つて信ずべきものだけを信ずるものだけが、汽車に乗ることができさるのだ。」

乙はかういひました。

——長興善郎の文による——

## 二〇 新年

暦の改ると共に、人は一歳づつ年をとるのであるが、實際は、そのたびに生まれ變つて、若くなるのである。新しい年を迎へるには新しい希望を以てするので、今年こそはと奮發するから、事業に對しての勇氣も生ずるのである。過去を顧れば、人の行爲には缺點もあり、失策もある。それをいつまでもくよくよしてゐては、前途の發展は望まれぬ。過去は水に流して、行手に光明を求めるのが、處世の良法である。そして

過去は水に流し行手に光明を求む處世



復活す

その好機、即ち年の改る日である。

我が國には、昔から大祓といふ儀式によつて、過去のあらゆる罪を一掃し、汚れた心をうち棄てて復活するといふ風習がある。これは六月と十二月との二度行はれたもので、即ち我が國民は、一年に二回づつ心身共に新たになつて、復活し來つたのである。この大祓の式は今でも行はれてゐる。就中十二月は、年も新たになる前であるから、この復活の儀式が盛大に、且つ嚴格に行はれるのである。

春秋に富む

そこで、我等は新年を迎へる用意としては、身分相應にできるだけ一切のものを新たにし、清くして、形の上にもこの復活の義を表すことに努めるのである。春秋に富む壯者は

還曆  
古稀

勿論、還曆に入り、古稀に達する老人でも、その生まれ變る心持には、異なるところがない。

簡樸

正月の儀式は、太古の質素簡樸の風を傳へて、今日に至つたものである。注連繩や、讓葉や、白木の三方や、土器や、昔ながらの祖先以來の風を繼承して、毎年繰返して行くところに妙味がある。即ち年々生まれ變ると同時に、年々昔を憶ひ出して行くのである。祖先から傳はつた掛物を懸けたり、古い道具を出したりして、遠い昔を憶ひ出すのである。

宗家

四方拜  
元始祭  
内外臣僚

我が國民の宗家と仰がれ給ふ皇室に於ては、我等が一家に於て家の祖先を祀ると同様に、新年には四方拜や元始祭を行はせられ、また内外臣僚を召させ給ひて拜賀を受けさ

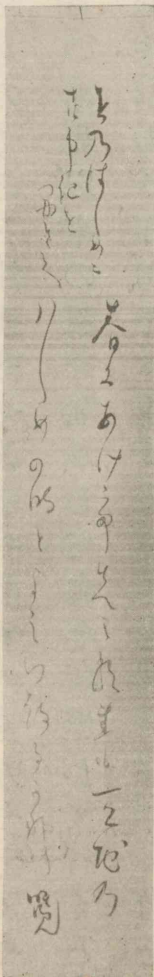


(一)福井の歌人、  
明治元年歿、  
年五十七

(二)古事記のこと。

せられ、御宴を賜ひなどし給ふ。これを思へば、我等は今、の世  
ながら、直ちに太古建國の昔を憶ひ起さずにはゐられぬ。余  
は橘曙覽(一)の

春にあけてまづ見る書(二)も天地の  
はじめの時とよみ出づるかな



橘曙覽筆蹟

といふ歌を、早くから深く感心してゐた。これ、かの

(三)荒木田守武の  
句

元朝(三)や神代のこともおもはる、

と同一の思想であつて、日本人の心には、元旦と神代とは離

れぬのである。

## 二二 眞の知己

一時の朋友を得ることは易く、眞の知己を得ることは難  
い。平素歡樂を共にする間は、肩を打ち手を執つて互に談笑  
するが、一旦利害相反すれば、忽ち仇敵(四)となるやうなものは、  
眞の知己ではない。眞の知己は、死生の境に臨んでも相信じ  
て疑はないものでなければならぬ。

(一)Italy.  
(伊太利)  
(二)Sicily.  
(地中海に在る。  
(三)Pythias

昔(一)イタリーのシシリ島(二)に、ピチアス(三)といふ男があつた。  
或罪によつて國王の前に引出されて、死刑をいひわたされ  
た。ピチアスは今生の思出に、老父母の顔が見たくてたまら



ない。死刑執行の日には必ず歸つてくるから、この世の名残に、今一度父母に會はせてもらひたいと歎願に及んだ。王は一言の下にはねつけた。

[Damon.

ピチアスの無二の親友に、<sup>(-)</sup>ダモンといふ若者があつた。王に向かつて、

「私はピチアスの親友でございます。彼は決して二言いたすやうなものではございません。どうか特別の御仁愛を以て、彼の願をお聞入れ下さるやうお願い申します。その代りに私を獄中に入れて、萬一期日に至つて彼が歸つて参りませんやうなことがございましたならば、私をおしおき下さいませ。」

といつた。王はこの友情に感じて、その願意を聞届けて、ダモンを獄屋に入れた。約束の日限は迫つたが、ピチアスは歸らない。王は獄卒に命じて厳しく獄門を固めて、ダモンの動靜に一層の注意を拂はせた。しかもダモンは平然として、少しも不安の色を示さない。彼はいつた、

「若し期日に至つてピチアスが歸らないとしても、決して彼の本心から出たのではない。何か不慮の故障が起つたのである。」

愈、約束の期日になつた。約束の時間が迫つた。けれどもピチアスは歸らない。影も形も見えない。ダモンも今はこれま



この時早く  
かの時遅く

でと、死ぬ覺悟をきめた。しかし、彼の親友に對する信用は更に變らない。彼はまたいつた、

「今ここで殺されるのは、最も信愛する友人の爲である。少しも恨むことはない。」

獄卒はダモンを刑場に引出した。彼の一命は寸刻の間に迫つた。この時早くかの時遅く、ピチアスは息も絶え絶えになつて、駆けこんで來た。彼は途中風波の爲に妨げられたのであつた。若し期日に後れるやうなことがあつては、一つには無二の親友を殺し、二つには二言を吐いた悪名を後の世に傳へると思へば、ゐても立つてもゐられない氣がしたが、如何ともし方がなかつた。船が陸に着くや否や、ひた走りに

走つて、刑場に駆けつけて見れば、ダモンはまだ生きてゐたので、餘りの嬉しさに、目前の死も何も忘れて、手の舞ひ足の踏む所を知らなかつた。

王は二人の信義と愛情とに感激して、ピチアスの罪を赦した。

「若し自分にもこんな親友をもつことができたら、王者の富貴も榮華もいらぬ。」

とは、王の心の奥から出た歎聲であつた。——高等小學讀本——

二三 沼津千本松原

若山 牧水

私が沼津に越して來ていつか七年経つた。或はこのま、

(静岡縣(駿河國)沼津市)



取得

(一) 静岡縣(伊豆國)天城山の沼津市の中を流れて相模灣に注いでゐる  
 (二) 片濱の松原  
 (三) 沼津市と原宿との間の海濱  
 (四) 静岡縣(駿河國)駿東郡原町。昔は浮島の原の宿などともいつた。  
 (五) 同庵原郡蒲原町の管内、吹上島の河口  
 (六) 富士山西の峽谷を流れて庵原郡蒲原と富士郡五貫島との間に海灣に注いでゐる。

ここに居据ることになるかも知れない、沼津に何の取得があるではないが、たゞ一つ私の自慢するものがある。千本松原である。

千本松原くらゐ見事な松がそろつた、またこのくらゐの大きさ豊かさもつた松原は、恐らく他にあるまいと思ふ。狩野川の川口に起つて、千本濱、片濱、原、田子の浦の海岸に沿うて徐に彎曲しながら、遠く西の方富士川の川口に及んでゐる。長さにして四里に近く、幅は百間以上の廣さを保つて續いてゐる。この全體を千本松原といふのは、或は當らないかも知れないが、しかも寸分の斷間なく茂り合つて、續きわたつてゐるのである。そして普通いふ千本松原即ち沼津千



千 殊に珍しいのは、すべて  
 本 この松には、所謂磯馴  
 松 の曲りくねつた姿態  
 原 がなく、杉や樺に見るや  
 うな眞直な幹を伸して、

本濱を中心とした邊が、最もよく茂つてゐる。松は多く古木で、二抱三抱のものが、眼の及ぶ限りみつちりと相並んで、聳え立つてゐるのである。

すくすくと聳えてゐることである。

今一つ二つ松原の特色として挙げたいのは、單に松ばかりが砂の上に並んでゐる所謂白砂青松式でないことであ



る。白砂青松は明るくて綺麗ではあるが、見た感じが浅い、厭き易い。ここには聳え立つた松の下草に、見事な雑木が繁茂してゐるのである。下草だの雑木だのといつても、一握の小さい枝幹を想像してはいけない。いづれも一抱前後、或はそれを越えてゐるものがある。

その種類がまたいろいろである。最も多いのはたゞ、犬讓葉の二種類で、一つは犬樟とも玉樟ともいふ樟科の木であり、一つはほんたうの讓葉の木の稍葉の小さいものである。そして共にかゞやかしい葉をもつた常緑樹である。その他もち、椿、檜、榎、棟、椋、とべら、ぐみ、臭木などが多く、たらなどの思ひがけないものも立混つてゐる。さうしてこれ等の木々の

根がたには、篠や虎杖いんげんが生え、萬両、藪柑子が群り、所によつては羊齒が密生して居る。さういふ所にはいつて行くと、もう濱の松原の感じではない。森林の中を歩く氣持である。

順序としてこれ等の木の茂み、またはその木の實に集つてくるいろいろな鳥のことを語らねばならぬ。が、不幸にして、私はたゞ徒にその微妙な啼聲を聴き、愛らしい姿を見るだけで、その名を知らぬ。僅かにそこに常住する鴉——これもこの大きな松の梢の茂みの中に見る時、思ひの外の美しい姿となるものである。殊に雨にいい。——季節によつて往來する山雀、四十雀、鶉、椋鳥、鶉、百舌、鶯、眼白、頬白などを數へるに過ぎない。有明月の影もまだ明らかな曉にそこにはいつ

有明月



て行けば、をりをり啄木鳥の鋭い聲と姿とに出會ふ。夜はまた遠く近く梟の聲が起る。見事なのは椋鳥の群で、數百羽のこの鳥が、中空に聳えた老松の梢から梢を群れながら渡つて行くのは壯觀である。

秋の紅葉は寒國のもので、暖かい國だとよく紅葉しない。楓などは寧ろ汚い黄褐色に染まつて、長い間枝頭に着いてゐる。僅かに櫨だけが暖國でもよく紅葉する。どうしたものか、その櫨がこの松原の中に多い。なかなか大きなものもある。老松の間に在つてこの木の漸く染まる頃から、この松原はよくなつてくる。茅ちやが美しい色に枯れ、萬両や藪柑子の實のうれてくる冬も、いい。冬は朝に夕に淡い靄が必ずこの松



千本濱の朝風

原の松の根がたに漂つてゐる。十二月には椿が咲いて――その頃まで撫子も咲いてゐるが――やがて春になる。春もいい。小鳥の聲の次第に多くなる初夏、この時もいい。だが眞夏だけは感心しない。この廣く且つ長い松原の中央に、縦に一筋の小徑が通じてゐる。狩野川の川口から原町の停車場に至る間、二里餘りは紛れなく通じてゐるが、それから西は判然してゐない。この小徑はもと甲州街道とも甲駿街道とも呼ばれたもので、



(一)駿東郡。

そのできたのは、現在の東海道よりずっと古いものださうだ。想ふに、今の東海道の通じてゐる邊は、昔は現在の浮嶋村(一)附近のやうに、一帯に深い沼澤地であつて、道路などは造れなかつたものであらう。そしてこの海岸沿の砂丘の上に一筋の道をつけて、通行してゐたであらう。それはとまれ、私はこの松原の中の甲州街道を歩くことを非常に好む。何ともいへぬ静けさ、何ともいへぬ明るさ、何ともいへぬ潤ほひが、この松原の、といふよりは、長い長い森の中の小徑に漂うてゐるのである。たまたま出會ふのは漁師たちで、たゞ松風と、稍遠い浪の音と、小鳥の聲とがあるのみである。

沼津から千本濱へ出ようとする濱邊の右手に、千本山乗

(一)天台宗の本山、滋賀縣滋賀郡比叡山に在る。  
(二)浄土宗西山派本山光明寺十五世。諱は空操。

荆棘の曠原

建言す  
法度

運寺といふ寺がある。當代よりは二十六世以前、山城國(一)延曆寺乗運公の實弟増譽上人といふ人が、この沼津の地に來て、以前鬱蒼として茂つてゐたと傳へられる松原が、相模の北條と甲斐の武田との戦争上の軍略から、一本残らず伐拂はれ、見る影もない荆棘の曠原となつてゐたのを嘆き、自ら植樹に着手した。しかし、今もさうだが、この濱は砂地でなく、荒い石の原である。植ゑてもなかなか根づかない。爲に上人は一本を植ゑる毎に阿彌陀經を誦し、且つ植ゑ且つ讀經しながら、辛うじてまづ一千本を植ゑつけた。そして時の政府に建言し、枝一本腕一本といふ嚴しい法度を設けて、苗木を愛護し、數代の苦心によつて、現在の壯大な松原ができ上つ



たものださうだ。元來この東駿河地方は、秋口から春にかけて吹きつける沖の西風の極めて烈しい所で、今でも大の男がまともに歩きかねるやうな風に出會ふことが屢ある。松原の絶えてゐた時代、その西風が海から汐煙を吹きあげて遠く四周に撒散らし、農作物はできなくなつてしまつた。増譽上人は單に松の眺の絶えたのを惜しんだばかりでなく、かうした濟世救民の志もあつたのである。この大きな松原に遮られて、汐煙はおろか、風そのものすらも、遠く數町の間には落ちて來ぬのである。

二三 松と大和心 池邊義象

濟世救民

鑄型

(一)江戸時代の國學者伊勢松坂の人。享和元年(二四六)年、歿。年七十一。  
 (二)名は彪。水戸の儒者。安政五年(二五)年、歿。年五十。

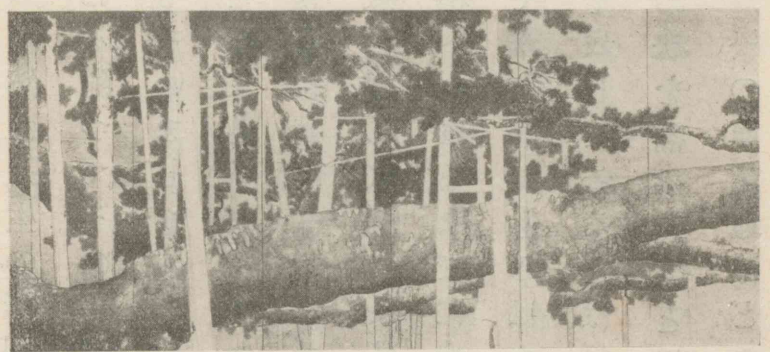
萬朶異名

自然は人生の鑄型で、人間は常にその鑄型の中に泳いでゐる。随つてその影響感化の多大なことは、素よりいふまでもない。まして人間は種々に理窟をつけて、自然を味ははうとしてゐるではないか。本居宣長が「たび敷島の大和心を櫻花に比して以來、また藤田東湖が萬朶の櫻を神州正大の氣の發して成つたものと唱へて以來、櫻は大和心の異名と稱へられるまでになつた。これは素より異論のないところで、誰も争ふものはないが、余はたゞ櫻が大和心の特質全體を表してゐるとは信じない。そこでこれに松を附加へて、その缺を補ひたいと思ふ。

松の原産地はどここの國であるか知らないが、現世界に於



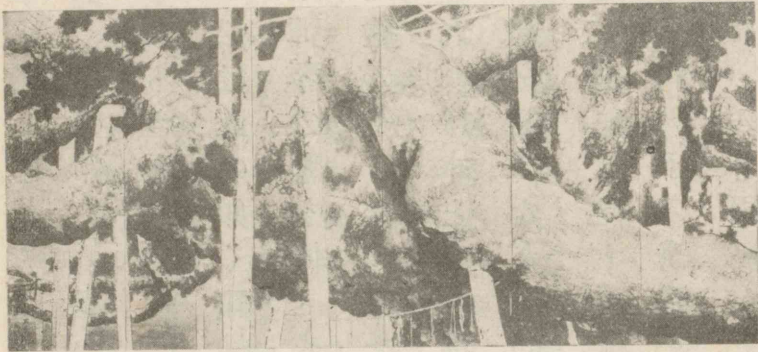
(一) 景行天皇の皇子熊襲を征して功あり  
 後征東の吹山  
 近江の吹山  
 伊勢の吹山  
 菟野の吹山  
 年三十七  
 (二) 尾張にたゞ津の向かへる尾津の松の崎なる衣はるる太刀



一のそ (筆雲掃種千) 松 老

て、我が國のやうに松の多い所はあるまい、また土地に適して、かやうに見事に發生してゐる國もあるまい。この點に於て、松は日本の木であるといつても差支はないと思ふ。かの日本武尊が尾津の崎なる一つ松とお詠みになつたのは、随分古いことであるが、松はそのずつと以前から、我が國の到る所にあつたものと思ふ。櫻が日本の花であると共に、松は確かに日本の木である。

媚ぶ 阿 婿  
 群小  
 風潮



二のそ (筆雲掃種千) 松 老

この松の、露霜を凌ぎ、雪霰を冒して、少しもその色を改めない高い操の如きは、今更いふまでもなく、我が大和心の雄々しさに比べて、決して不足はない。また大抵の草木は美花を着けて、世に媚び人に阿る觀があるのに、松だけは不動の姿勢をとつて、そんな人目を喜ばせるやうな群小のしわざを嘲笑して、いつも緑色を保持し、風潮に動かされない有様は、正に大丈夫の態度を備へてゐる



元勳

と見なければならぬ。殊に年を経ると共に、その幹が龍の如く、虎の如く、鳳凰の如く、麒麟の如く、世人に畏敬され、愛重されるさまは、元勳、偉人にも譬ふべきであらう。

彈琴の響

松は此の如く剛性のものであるが、一たび吹く風を宿せば、彈琴の響を傳へ、或は長堤十里、霞を曳き、霧を吹いて、まるで繪のやうな光景を呈することがある。また波打際に枝を垂れては水と、その清さを争ひ、或は少年少女に引かれて、その齡を延すなど、その優美柔和な點に於ても、また我が大和心に通ふことは決して少くない。松島や、三保や、天橋立の如き所謂天下の奇勝を以て鳴る土地が、松に負ふところの少くないのも、國民がそれ等の勝地を歎賞して已まないのも、

(一) 靜岡縣(駿河國)駿河灣につぎ出てゐる。長さ四町餘。

堅忍不拔

泰然自若

自覺

謂れがないわけではあるまい。

かやうにいひたてれば限りもないが、剛柔兩性を具備して、堅忍不拔、泰然自若として風潮に動搖しないのは、自覺ある日本人に比して、斷じて不足はない。一時に咲き、一時に散るその潔き有様や、花に一點の醜を留めないその美は、櫻を以て花の第一とし、我が大和心に似てゐるところを賞するのは、今更いふまでもないが、この松の貴ぶべきところも、また大いに味はふべきで



天橋立



津々浦々

ある。この木は畏くも神前、宮庭をはじめ、津々浦々に至るまで、一木を見ない所はなく、風景に、盆栽に、繪畫に、我が國人が昔からこれを好むのも、その心が互に相通ずる爲であらう。あゝ、この松、剛柔両性を備へる松、全國全家悉く有する松が、どうして我が國民に感化を與へないで居らうか。私はここに櫻と相並べて松を以て日本の木とし、大和心の象徴として、更に大いに賞揚したいと思ふのである。

佛閣  
原始  
佛典  
佛教の書物即ちお経  
世俗に世の中で俗に

縁起の話「自修文」

縁起といふ詞に二つの意味がある。その一つは、神社佛閣の縁起などといふ縁起で、讀んで字の如く、事物の縁つて起るところ、即ち原始の義。もとは佛典から出た熟語だといふ。今一つは、世俗に、縁起

嘉瑞、吉兆  
共にめでたいきざし

卑近  
手近なわかりやすいこと

(一)京都大阪地方のこと。もと京都に皇居があつたもので、いつたもの

がよい、わるい。また、縁起を祝ふ。などといふ時の縁起で、前にいつた神社佛閣の縁起とは全く違ふ。勿論右の意味が一轉したのではあるが、人の行末、また事業の成功をその初に祝ふのを、縁起を祝ふ。といつたので、再轉しては、縁起とばかりいつて、嘉瑞とか吉兆とかいふ意義にもなつたのである。その場合、後世は「縁喜」と文字を書替へても通じてゐる。左に一二卑近な實例を擧げて説明しよう。

東京では大晦日に「晦日蕎麥」といつて、蕎麥を食べる。何故大晦日に蕎麥を食べるかといふに、蕎麥は長くのびるもの故、身代ののびるのを祝ふのである。また東京の風俗で、轉居する時「引越蕎麥」と稱して、新宅の四隣へ蕎麥を配ることのあるのも、やはり細く長く交際のできるやうにといつて、縁喜を祝ふのである。

また大阪で附木を配るのも、やはり上方の縁喜を祝ふ風俗である。附木は薄い板の先に硫黄が着いてゐる。昔は竹の先へも硫黄をつけたもので、これをたゞ「硫黄」とばかり稱してゐた。そこでこの附



先祝ふ  
附木はさいて  
使ふもの故  
さく硫黄と先  
方を祝ふもの  
をかけたもの  
容語  
いれもの

亡者  
死んだもの  
分類  
種類によつて  
わけること

(第三十六代)

木を配るのは、先祝ふといふ謎で、やはり縁喜を祝つてゐるのである。餘所から祝儀の赤飯などをもらふ。その容語の重箱には、どこでも南天の葉を敷く。南天を難轉の語に響かせて、災難を轉ずる心だといふ。その重箱をあけて中に附木を入れて返すのも、また先祝ふといふ心の縁喜である。

また徳川時代に、女子が「おいはい」と假名で書く場合には、「おいわひ」と書いたが、これもいはひでは、亡者の位牌と同じ言葉に聞えるのを忌んだのである。以上のやうなことを分類して見ると、凡そ四種類ほどになる。

まづ支那の眞似をしたものからいふと、孝徳天皇の御代に、長門の國から白雉を献上した。これは嘉瑞吉兆であるといふので、年號を白雉と改めた。これが日本で縁喜を祝つた初であらう。またこの頃白鳳が現れたといふので、白鳳といふ私年號もできた。鶴龜だの、松竹梅だのをおめでたいものにしたのも、支那から傳はつた風俗

創意  
はじめての思  
ひつき

出陣  
いくさに出る  
こと  
打鮑  
鮑の肉を薄く  
へがし、のし  
して乾かした  
ものは、のし  
はびともいふ  
かち栗  
栗を十分乾か  
して、火であぶ  
り、白でつぶ  
て、殻と皮とい  
を取去つたも  
の

である。

次に日本の創意に移つて、おめでたい意味に聞える言葉でものを祝つた例を挙げると、正月の餅は昔から祖先の御祭に用ひたものであるが、これに附屬した品物は、残



陣出 (淨法寺高陽筆)

出  
ら  
ず  
お  
め  
で  
た  
い  
意  
味  
を  
も  
つ  
て  
あ  
る  
ま  
づ  
御  
供  
餅  
の  
下  
に  
敷  
く  
裏  
白  
は  
深  
山  
に  
在  
つ  
て  
霜  
雪  
に  
凋  
ま  
な  
い  
め  
で  
た  
い  
草  
で  
そ  
の  
上  
漢  
名  
を  
齒  
朶  
と  
い  
ふ  
齒  
は  
齡  
と  
よ  
み  
朶  
は  
枝  
で  
命  
長  
く  
の  
び  
る  
枝  
と  
い  
ふ  
こ  
と  
で  
あ  
る  
ま  
た  
橙  
と  
讓  
葉  
と  
は  
親  
子  
代  
々  
讓  
り  
受  
け  
て  
子  
孫  
長  
く  
繁  
昌  
す  
る  
意  
味  
で  
あ  
る  
武  
家  
の  
時  
代  
に  
は  
出  
陣  
と  
い  
ふ  
と  
打  
鮑  
と  
か  
ち  
栗  
と  
昆  
布  
と  
を  
三  
方  
に  
載  
せ  
こ  
れ  
を  
肴  
に  
し  
て  
祝  
盃  
を  
舉  
げ  
る  
こ  
れ  
は  
打  
つ  
て  
勝  
つ  
て  
よ  
る  
昆  
布  
と  
い  
ふ  
意  
味  
に  
寄  
せ  
て  
祝  
つ  
た  
の  
で  
あ  
る  
鯉  
節  
を  
祝  
物  
に  
使  
ふ  
の  
も  
元  
は



勝武士の意味であつたが、今では何の意味もなしに、たゞおめでたく使はれてゐる。

それから事物におめでたい名をつけて祝ふといふのは、子供の名に長松、鶴太郎、お龜、お千代などをつけるのは、長命を望む心であり、男兒の祝着に翁格子おきなごうを染めるのも、翁といふ縁喜である。また不吉を忌み避ける著しい例は、死といふ音に通ずるといふので四字を忌み、四十二歳の二歳兒たつこは、四二しにとも、四四ししともなるから、一旦捨てて、更に拾つて育てるといふ風習。その子は名前も捨吉とか、お捨とか呼ばれるなどといふことがある。

最後に不吉な言葉をおめでたい言葉に言替へるのは、婚禮の席で「歸る」といふのを嫌つて、「お開き」にするといふやうな例で、忌言葉いみことばといつて、今もなかなか廢れずに行はれてゐるものである。

關根正直の文による

翁格子  
大きな格子の中に小さい格子のいくつがある模様。  
四四  
四が二つかさぶなると見えていふ。

(一)文學博士、古典學者。古

### 二四 諏訪湖畔の冬

島木赤彦

(一)諏訪湖の東方山梨縣に跨がる。海拔二八九九米。  
(二)蓼科山とも蓼品山とも書く。八ヶ嶽の北。諏訪湖の東北。海拔二五三〇米。  
(三)諏訪湖の東方。海拔一八八〇米。  
(四)長野縣の殆ど中央に位する。東西一里半、南北一里半。周囲四里二十町。  
(五)長野縣諏訪郡豊平村。

富士火山脈が信濃に入つて、八ヶ嶽(一)となり、立科山(二)となり、霧ヶ峰となり、その末端が大小の丘陵となつて、諏訪湖へ落ちる。その傾斜の最も低い所に私の村落(三)がある。傾斜地であるから、家々石垣を築き、僅かに地をならして宅地とする。最高所の家は丘陵の上であり、最低所の家は湖水に沿ひ、その間の傾斜地に、百戸足らずの民家が散在してゐる。

山から丘陵、丘陵から村落へ續く木立が、皆落葉樹であるから、冬に入ると、傾斜の全面が皆あらはになつて、湖水から反射する夕日の光が、この村落を明るく寒くする。寒さがおひおひに加つて、十二月の末になると、湖水が全く氷結する。



湖水といつても、海面から二千六百尺の高所にあり、村落はその湖水よりもなほ高い丘上にあるのであるから、嚴冬の寒さは非常である。朝、戸外に出れば、髭の凍るのは勿論であるが、時によると、上下睫毛の凍着を覚えることすらある。かやうな時は、顔の皮膚面に響き且つ裂けるが如き寒さを感じずる。

この頃、私の村では、毎朝未明から、かあん、かあんといふ響が湖水の面から聞えてくる。これは、人々が氷の上に出て、たきといふ漁をするのである。長柄の木槌で氷を叩きながら、十數人の男が、一列横隊を作つて向ふへ進む。槌の響で湖底の魚が前方へ逃げるのを、だんだん追ひつめて、豫め張つ

## 視線

てある網にかゝらせるのが、たきの漁法である。私の家は村の最高所にあり、庭下の坂がすぐ湖水に落ちてゐるので、一列の人々を見るには、可なり俯目にならねばならぬ。俯目になつた視線が、氷上の人まで達する距離は可なりあるのであるが、氷上の人の槌を揮ふ手つきまで明瞭に見える。氷を打つ槌先が視覚に達する時、槌の音はまだ聽覺に達しない。次の槌を振上げる頃に、漸く前の槌音が聞える。それで槌の運動と音とが交錯して、目と耳とへくるのである。目にくるものも、耳にくるものも、微に徹して明瞭である。單にそればかりでない、一列の人々の話聲までも、手に取るやうに聞える。空氣が澄んでゐる上に、村が極めて閑靜であるからで



扮装

ある。  
 氷切の作業は、快晴の夜を選んで行はれる。温度が低下して、氷の硬度が増すからである。これは若者でなくては到底堪へられぬ勞作である。若者は、宵の口から藁製の雪沓を穿き、その下にかつちき(かんじきのこと)をつけて、湖上へ出かける。綿入を何枚も重ねた上に、厚い半纏(はんまわ)を纏ふので、體は所謂着ぶくれになつて、横も豎も同じに見えるといふ姿である。かやうな扮装(いんさう)をした若者が、氷の上に一列に並んで、氷を鋸びきにひき始める。氷をひく手元は、初め暗くて後に明るい。氷に眼が馴れるのである。三尺四方ほどの大きさにひき離される氷の各片が、切離されると共に水中に陥る。それが

龜裂



氷挾といふ大きな鋏で挟み上げられる。挟み上げられた後の水には星が映つて、搖れてゐる。大凡一望平坦な氷原にあつて、空は手の届くやうな低さを感じず、星が降る如く光り満ちてゐるのである。星の光は水に、あつて水の明りとなり、氷にあつて訪水の明りとなり、その明りに全く馴れ湖るに及んで、相隣する人の顔まで明瞭に見えるやうになる。夜が漸く更けて寒さが益加ると、氷原の諸所に龜裂の音が起る。寒さの爲に氷が収縮するのである。それが氷原を



## 夜が白む

越えて四周の陸地山地まで響きわたる。その響の下に立つて鋸をひいてゐる若者の背中には汗が流れ、暫く立つて休息してゐると、その汗が背に凍り着くのを覚える。さういふ時には、鋸の手を休めないやうにするのが、唯一防寒の手段になるのである。それ故若者はたゞせつせと切る。腕が疲れると唄も出ない。たゞ時々睡氣がましに大きな聲を張上げるものもあるが、それも永くは續かない。餘り疲れて寒くなれば、氷の上で焚火をすることもある。かやうにして夜が白んでくると、積まれた氷板が山の如く累り、それが夜明から運んで、湖岸の田圃に積上げられるので、田圃には連夜切上げられた氷板が、長い長い距離にわたつて正しく積並べら

## 壘壁

## 白晝

れて、恰も氷の壘壁を築いた如き觀を呈する。積まれた氷には多く筵類を被せて置くが、覆がなくとも、白晝の日光で溶けるやうなことはない。海拔二千五百尺の地のいかに寒いかは、これで想像し得られるであらう。

もの遠い感  
静寂に歸す

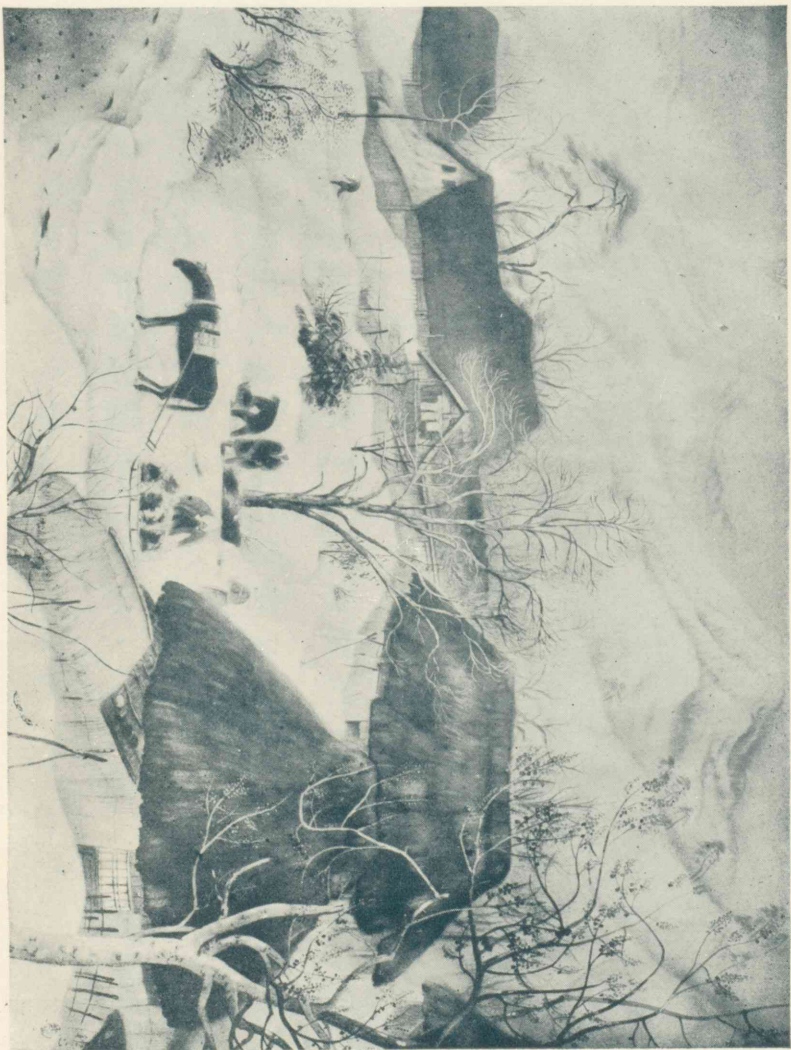
私の村はまた夜になると、ところどころの家から藁を打つ槌の響が聞える。氷切などに行かぬ人々が、草鞋や雪沓を造るのである。ひつそりとした夜の村に響く槌の音は、鈍くて重くて底のない響であり、聞いてゐれば、るほどの遠い感じがする。氷叩きの槌の音は、遠くて近く聞える。藁を打つ槌の音は、近くて遠い感じがする。響くところは相反するけれども、静寂に歸するに於て一である。



二五 冬から春への北國 小川 未明

一夜のうちには雪が二尺も三尺も降るといふやうな光景は、南國に生まれた人々には到底想像することができない。吹雪の怖しさでも、雪中に山を越すことの困難さでも、すべて北國の冬に起るやうな現象は、それを経験した人でなければ、わからないであらう。あの猛進しつゝある汽車が、途中で雪の中に埋没するといふやうなことも、廣い野原にうなりを立て、白い海嘯のやうに渦を巻いて押寄せる吹雪を見た人でなければ、容易にうなづかれないのだ。

海嘯



冬國 大貫鐵心筆



僅かに前後數間くらゐしか離れてゐなかつた仲間の姿を見失ふまでに、雪の猛襲は歩いてゐる人間の目や口を無理に塞いでしまふ。そして叫んでも呼んでも、それは無益であらう。礫ついでの如く顔を叩きつける風雪に遇つては、聲も立てられなければ、目をあけてゐることもできない。もとより目標にしてゐた木立や森の影などは、どこへか没してしまつて、たゞ四方を見廻せば、漠々として白い壁が突つ立つてゐるやうに、眞白なばかりなのだ。道といふもののあらうはずがなし、それに日はぢきに暮れてくる。寒氣は刻々に肌を侵して迫る。し方なくぼんやりとして佇んで、いつしか疲れて、雪の上に空しく坐つて死を

漠々として



Orange

待つより、どうすることもできなくなるのだ。  
 こんな日に、南方幾百里を隔てた所はどうであらう。そこにはもう春が来てゐる。山は赤みを含んで、草木は芽ぐまうとしてゐる。南の日當りに面した崖には、赤い椿の花が咲いて、藁屋のある國には、黄色な水仙の花が香つてゐる。海は眞晝時分には銀を溶かしたやうに白びかりを放つて、地平線は常にきらきらと異様に輝いてゐる。山には畑つゞきにオレンジが黄金色に熟して、濃緑色な葉蔭からのぞいてゐる。ほんたうに海を見ながら笛を吹く詩的な繪をば、誰の眼にも思ひ出さずにはおかない。  
 同じ日本の中でも南と北とは、日を同じうしてこれだ

けの相違があるのだ。

北方に生まれた人は、子供の時分から自分の生まれた村の春、夏、秋、冬に親しむのであるが、南方に生まれた人は、やはりそれと異なつた南國の春、夏、秋、冬の自然に、いつしかその性格まで變化させられるのであつた。

異國情緒  
 夢幻的

概して早くから文化の開けた、そして舊い港があり、その港には異國情緒があり、またそれについての傳説などの残つてゐる地方の春は、それにふさはしい夢幻的な感じを、例へば、日の光が屋根の瓦に流れ、白壁を晒すにしても味ははれるのだ。  
 人買船のやつて来たといふ昔の物語を、今もなほ深く信



童話的  
個性

じてゐる北方の海濱に育つた子供等は、秋から冬、冬から春になつても、まだいつまでも暗い彼等の海に對して、別種の奇怪な空想に耽るのを常としてゐる。  
この二つの夢幻的な、また童話的な色彩と空想とは、南と北との有する特殊な個性と見なさなければならぬ。言換へれば、詩的空想の二つの色彩でなければならぬ。

二六 野梅

近松 秋江

梅は野梅こそ趣の深いものである。自分の幼い頃、十四五町の田圃道を小學校へ通ふ途中の村里に、竹藪の根本に、いさゝ川が流れてゐて、その堤の上だの竹藪の蔭などに、古く

料峭

一陽來復

から野梅が多くあつた。子供心に季節の移り變りなども、ただぼんやりした記憶しかなかつたが、いつ通つてもぞつとする藪の片蔭に、曉の明星のやうな清白な梅の蕾が、三點、四點、綻びそめる頃になると、何となく自然といふものが懐かしい感じがするのであつた。その頃から料峭たる寒威は次第に緩んで、田圃の間を流れる小溝の水も、漸くぬるむのである。私はその時眼を上げて、青陽の空を眺め、きらきらと光の漲りわたる四圍の山々を仰ぐ。何等の奇趣もない平山、凡水の我が郷里ではあるが、一陽來復のその季節になると、そんな鄙びた田野までが、美しい所のやうに思ひなされるのも不思議である。



(一)徳川時代の歌  
人。天保十四  
年(二五〇三  
十六)歿。年七

粗朴

野梅はそこばかりでなく、到る所の野の隈、林の中などに  
見られた。田舎は農閑の頃で、青い麥の芽は四五寸を抽き、冬  
の長閑な日はそよとの風もなく、向ふの山の中腹には小松  
原が茂つてゐて、もうちろちろと陽炎が立つてゐる。私は香  
川景樹の歌だつたか、

かげろふのもゆる山邊の小松原

わらびの多きところなりけり

といふ歌を思ひ出した。静かな冬の日が野山に漲つて、ちろ  
ちろ陽炎の立つ岡邊に出でて、農家の若いものどもは、暇に  
まかせて、そんな日當りに面した小松原で兎狩をする。そし  
て獲物の兎を料理して、その晩は大勢寄集つて、粗朴な夕食



長谷川光孝筆

野梅



(一) 燕雀類の鳥。  
支那原産。物  
真似をよくす  
(二) 新聞記者。歌  
人。東京の人。  
明治十八年生。

の宴を張るのである。その頃から、野梅が野末の林の隈だの、  
藪の小蔭などに忘れられたやうに綻びそめるのである。

(一) 九官鳥と鶯 [自修文]

(二) 土岐善磨

この鶯は或朝ひよつくり窓から書齋へ飛びこんで来たのだ。わ  
けもなく捕へられたので、そのまゝありあはせの小さい籠に飼ふ  
ことにした。もとより藪鶯で、ろくな鳴聲ももつてはゐなかつたが、  
それでも「ほうほけきやう」と鳴くことは知つてゐた。水をやつたり、  
餌をやつたりしてゐるうちに、すっかり馴れて、朝の寢覺などに夢  
現ともなく枕の上で聞いてゐるのが楽しみになつた。

茶の間の方には前から九官鳥が一羽飼つてあつた。お早う。など  
はよくいへるやうになつてゐたが、この鶯が稍離れた書齋の方で  
「ほうほけきやう」と鳴くやうになつてから、じつと聞耳を立ててゐ



木魂  
やまびこ。

た九官鳥は、いつのまにか鶯が「ほう……」と鳴き始めると、すぐそのあとを承けて、「ほけきやう」と物真似のいたづらをするやうになつた。「ほう……」と息をふくめてから、さて「ほけきやう」とほがらかに歌はうとしてゐる鶯にとつて、このどこからともなく聞えるお先走りの自分の歌聲は、山深くかへつてくる木魂こだまとは違つたもので、不思議な薄氣味の悪いものだつた。「ほけきやう」を續けるのを止めて、最初の「ほう……」といふのを少し永く延して、あとの不思議な歌聲を待つてゐると、またきつと「ほけきやう」と、鏡の反射のやうに聞えてくる鶯はこの怪しい不氣味さに堪へられなくなつて、遂に「ほけきやう」といふ歌聲を、自分の唇から出すことを憚るやうになつた。「ほう……」と鳴いては、あとを續けずに、四邊をきよるきよると見廻す。九官鳥は初のうち「ほけきやう」といふ物真似をおもしろくも思つてゐたが、相手が歌はなくなつたので、自分も興がなくなつて、「ほけきやう」を鳴かなくなつたのだが、その間にほんたうの鶯の方は

習性  
くせ。

また、自分の歌聲も忘れた氣持になつて、たゞ「ほう……」といふだけで止めてしまふ習性しよせいがついてしまつた。  
「ほう……」と鳴くだけで「ほけきやう」のない歌聲は、藪鶯としても餘りに不器用だが、その後、口笛で教へこまうとしても、なほ不思議



九官鳥(町田曲江筆)

がつて、どうしても相變らず「ほう……」といふだけしか鳴

かない。

……これはH君の家でのことなのだ。この間遊びに行くとき、その書齋に鳥籠があつて、小さい鶯が首をかしげて「ほう……」と鳴いて、そのまゝ黙つてしまふのを、不審に思つてきいたところが、こんな



話をしてくれたのである。

一體九官鳥の本來の鳴聲は何といふのだらうか。鶯なら、どんな鶯でも、「ほうほけきやう」と大抵は鳴くのだが、九官鳥は人間の話聲などの眞似は巧にするけれども、眞似はいかにうまくても、本來の鳴聲にはなりえない。「お早う」と呼びかけても、九官鳥は人間にならないと同様に、「ほう……」のあとを承けて、「ほけきやう」と鳴いても、やはり鶯にはならないのだ。「ほう……」と鳴いただけで、あとを眞似られた爲に、「ほけきやう」を忘れてしまつた鶯も、ふがひないといへば、ふがひないやうなもの、それでも鶯であることは、動かし難い事實だ。「ほう……」といふ最初の歌聲まで九官鳥は眞似ることがあるかも知れない。またその「ほう……」といふのまでこの鶯はいはなくなつて、黙々としてたゞ籠のうちに四邊を見廻すやうになつてしまふかも知れない。

「どちらの生活が幸福なのですかね。」

「お伽噺みたやうな問答ですね。」

わたしはH君とこんなことをいつて、新しく運ばれた紅茶を飲んだ。

二七 大石良雄 その一

山路 愛山

赤穂の城下は早馬の爲に大騒となりぬ。江戸城中刃傷の報藩邸に達するや、早水藤左衛門、茅野三平は直ちに馬に跨がりて、日に行くこと三十里、五日にして赤穂に達し、變を國老大石良雄に報じたるなり。長矩自盡の命下るや、原惣右衛門、大石瀨左衛門は更に同じ早さを以て赤穂に達したり。君家事あり、衆情恟々、危機は始めて英傑を呼出せり。門閥に於て國中たぐふものなく、しかも温厚にして庸愚なるが如き

(一)播磨國、兵庫縣、赤穂郡、城頭長矩。  
(二)元禄十四年三月十四日長矩吉良義央を江戸城中で傷つけた。  
(三)名は滿義、四十七士の一人。  
(四)名は重實、討入の前自殺した。  
(五)通稱内藏助。  
(六)名は元辰、四十七士の一人。  
(七)名は信清、四十七士の一人。  
自盡  
衆情恟々  
門閥  
庸愚



器局  
光を韜む

隱然

恭順す

城を枕にす

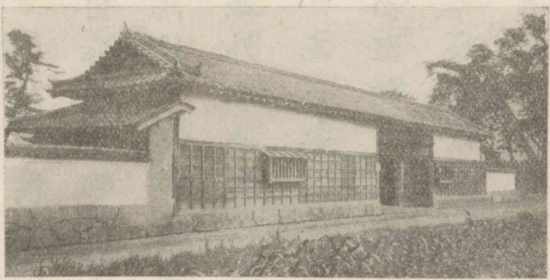
大石良雄は、ここに始めて彼の器局を知られたり。晝行燈の綽名を蒙りて、久しく光を韜める彼は、衆人に驚異せられぬ。赤穂城中の會議は開かれたり。事情は愈明白になりぬ。大野黨の一團は隱然として分れぬ。大野九郎兵衛は良雄と同じく赤穂の家老にして、班は良雄の下に在りしが、長矩に寵用せられ、且つ年老いて事に慣れたりしかば、勢力は却つて大なりき。彼は専ら幕府の命に恭順すべきを唱へて、なるべく温和に城を明渡さんことを主張せり。然れども血氣に逸る藩士等は、彼を以て卑怯なり、不忠なりとし、上使を引受け、城を枕にして潔く討死すべしと唱へ出せり。良雄はいへり、まづ主君の弟大學頭長廣君をして、主君の後を嗣がしめんこ

左祖す

(一)今大垣市。城  
主戸田采女正  
は長矩母方の  
從弟

(二)元祿十四年。

殉死



大石良雄の舊邸(稿赤)

とを幕府に請ふべし」と。

越えて二日、城中の會議はまた開かれたり。良雄は前説を繰返せり。大野は異議を述べたり。人々は多く良雄の説に左祖せり。大垣侯戸田采女正は、大學頭を立てんと請ふことの、却つて幕府の怒を招くに過ぎざるべきを報ぜり。逃亡は始れり。(二)四月十三日、大野は遂に遁逃せり。人は減ぜり。籠城は遂に行ふべからずなれり。

老人は殉死の議を唱へ、青年は復讐の論を主張せり。良雄は復讐の説を執れり。復讐の説は勝てり。血判に與るもの百



難に投ず

十餘人、その中江戸より來つて難に投ずるもの僅かに十八人。

血沸く

道路は清潔にせられたり。人民は警められたり。四月十八日、赤穂城の上より受城使の來るは望まれたり。藩士の血は沸けり。良雄は極力彼等をして靜肅ならしめたり。城中より城外へ使者は往返せり。翌日城は難なく明渡されたり。何事かあるべしと待設けたる世人は、赤穂藩士の餘りに温和なるに驚きたり。

(一)山城國(京都府)宇治郡。優游自適。四通發達の地。天下の視聽。

良雄は京都の山科<sup>(一)</sup>に住して、優游自適せり。田園を買ひ、居宅を營みて、永住を装へり。彼は此の如くして身を四通八達の地に置き、天下の視聽を集め、自ら晦まして上杉氏の諜者

(二)江戸本所松坂町。采邑。

を欺けるなり。諜者は雙方より出されたり。上杉氏は良雄を京都に偵察せしめ、良雄は吉良氏を江戸に偵察せしめたり。上杉氏は吉良氏を保護することに努め、人を遣して吉良氏の邸<sup>(一)</sup>を守らしめ、且つその采邑の人にあらざれば婢僕に用ふることなからしめき。ここを以て吉良氏の事情を探るは極めて難かりき。

(三)長矩自盡の日。赤穂町大字上假屋、舊赤穂城址内に在つて淺野家三代の菩提寺。花謝し鶯老の(四)京都。破廉耻。誹謗。恬として關り知らず。

年は暮れぬ。記憶すべき三月十四日は再び來りぬ。赤穂の華岳寺は市民の手向くる香火に煙りぬ。良雄は在京の同志を集めて、先君の忌祭を修めぬ。かくて花は謝し鶯は老いて、四條河原の夕涼に都の群集雜沓する頃となりぬ。腰拔、賣國、破廉耻の誹謗は愈、良雄の頭を壓せり。しかも彼は恬として



(一)通稱忠左衛門  
一黨の故老で、  
長雄に代つて  
江戸に在る同  
志の統領であ  
つた。  
一縷の望  
義氣金鐵の  
如し  
同盟

外舅  
(二)通稱主税。

關り知らざるものの如し。

忽ち飛報あり、江戸の吉田兼亮より來る。いふ、七月十八日長廣藝州に預けられたり。と。一縷の望は絶えぬ。この時まで義氣金鐵の如く見えし同盟は、弛み始めたり。眞に復讐の志なく、長廣に因りて君家の或は再興せられんことを希望せる人々は、漸く血判を悔い始めたり。或者は久しく音信を絶ち、或者は遁逃せり。良雄は盟書を同志に還して、また復讐の念なきを示せり。同志の過半は憤激せり。良雄はここに於て彼等にその眞意を語れり。而して最も堅固なる最後の同盟は成れり。この年十月に至つて、良雄は妻と二人の幼兒とを外舅石束氏に託し、獨り長子良金(三)を携へて江戸に向かひぬ。

### 二八 大石良雄 その二

(一)江戸麻生我善  
坊。今徳川侯  
邸の一部。  
刺客  
餘命おぼつ  
かなし  
一死を賭す

(二)武藏國(神奈  
川縣)橋樹郡  
御幸村字平間。

吉良氏の防衛はなほ密なりき。彼はその本所の邸を以て卑濕なりとし、これを修補するまで麻布なる上杉氏の別邸に住まへり。これ彼が刺客を避くる計なりき。同盟は復讐に急げり。殊に老いたる人々は餘命のおぼつかなきを以て、早く事を濟まさんと欲せり。或者は寧ろ白晝公然、吉良氏を襲うて一死を賭せんと欲せり。しかも良雄は聽かざりき。  
良雄父子は直ちに江戸に入ることを敢へてせざりき。彼はまづ池上(二)の平間村にありて、吉良氏の動靜を窺ひ、十一月五日に至つて、漸く江戸に入れり。父子は變名して垣見五郎



兵衛同佐内と名のりぬ。年少なる良金は始めて江戸を見たりしなり。

十二月に至つて吉良氏の邸は成れり。而して夜々怪しげなる青年はこれを窺へり。彼等は何處より來り、何處へ去るを知らず。五更に至つて他の一隊と交代せり。さすがの吉良氏もこれに氣づかざりき。しかも間諜探偵すべて効を奏せず。秘密は却つて吉良家に入出入する茶道より、同盟の一人横川宗利に漏れたり。義央の邸に歸るべき日は明らかに成りぬ。復讐の日は即ち定まりぬ。

十二月十三日、良雄は卒然、(二)淺野長澄の邸に至りて、長矩の後室瑤泉院夫人に謁し、主家の預り金を會計して、その餘剩

五更

(一)通稱勘平。

(二)長矩の室の實家。備後國(岡山縣)三次城主。

欽仰す

やはある

(一)江戸芝高輪。

霏々

を還せり。しかも、かの一事はなほ秘して語らざりき。蓋し夫人は夙に賢を以て藩士に欽仰せらる。去年の變、大學頭長廣は老中の命を受け、取る物も取敢へず、走り還つて夫人に告げたり。夫人は少しも驚かず、徐に問へり、仇人は誰にして、その死生は如何(一)と。長廣は義央の死生を知らざりき。夫人はいへり、更に登城して後、再び我を訪はれよ。兄死して、弟たるもの仇の存亡を知らざることやはある(一)と。かくて夫人は終身長廣に會はざりき。

翌十四日の朝、良雄は、(一)泉岳寺に至りて長矩の墓に謁し、三百金を寺僧に寄せて去れり。

この夕、雪霏々たり。同盟者は漸く集れり。火事装束せる四



鬪諍叫喚

十七個の人物は、三隊に分れて吉良邸の三面を圍めり。笛聲は雪夜の寂寥を破れり。鬪諍叫喚の聲は聞えたり。すでにして再び笛は鳴れり。火事装束せる四十七個の人物は、吉良邸を出去れり。夜景は初の寂寥に返れり。

鹵簿

雪晴れて、夜もまた明けたり。例の如く十五日を祝すべき登城の諸侯と武士とは、城をさして鹵簿を急げり。忽ち聞く、路人の喧噪なるを始めて知りぬ。赤穂の浪士が吉良氏の邸を襲うて義央の首を獲たるを。

喧噪

風説區々  
飛語紛々

風説は區々たり。飛語は紛々たり。いはく、吉良氏を襲ひしものは獨り四十七人に止らず、この外なほ黒装束をなせる百二三十人ありて、吉良氏の門外を圍みたり。いはく、上杉氏

の兵は四十七人を追撃せり。いはく、淺野氏と上杉氏と相鬪はんとすと。

良雄は吉田兼亮、富森正因を大目付仙石伯耆守の第に遣りて事實を報ぜしめ、同志相率ゐて泉岳寺に至り、義央の首を長矩の墓に供し、祭文を讀みてその志を告げ、靜かに官裁を待てり。寺は三斗の酒を置きて、壯士を勞へり。人ありいふ、「上杉氏の衆至る。」と、良雄は同志を警めて、防禦の備をなせり。而して上杉氏の衆は終に來らざりき。

この日、良雄等は仙石氏の第に招かれ、細川(熊本)、久松(松山)、毛利(長府)、水野(岡崎)の四家に預けられたり。良雄は他の十六人と共に細川氏に、良金は他の九人と共に久松氏に。

官裁

(一)通稱助右衛門、  
(二)世馬國(兵庫縣)出石の城主久尙



自裁す

温藉

長者たる品  
位  
失墜す

主一  
(Stoics)

職として…  
に由る

元祿十六年二月四日、四十六人は死を賜はれり。細川綱利は良雄等に訣別の盃を賜へり。良雄は他の十六人と共に、幕府の檢死の前に自裁せり。

良雄は外温藉にして、内に枉ぐべからざる意志を有したりき。彼は何事もうち静めて、騷がしきことを嫌ひたりき。彼はいかなる場合にも、長者たる品位を失墜せざりき。然れども彼は徒に平和を愛するものにあらず。なすべき事は必ず成遂げ得べき主一と堅忍とを有したりき。彼はストア學者の表面と戰國武士の裏面とを有したりき。彼は愛すべくして狎るべからず、畏るべくして嫌ふべからざる人なりき。彼が同盟の首領として成功せし所以のもの、職としてこの品

性ありしに由れり。

— 愛山文集 —

### 二九 太陽と春

福田 正夫

やはらかい風が、

輝いた海洋から地上にのぼる。

光つてゐる畑、

光つてゐる樹、

光つてゐる葉、

一つ一つがみんな春の呼吸。

緑の春は

樂しげにゆらぎ、

よろこばしさにゆらぎ、



「生きてゐる、生きてゐる。」と光の中できょやく、  
黒い土がその下に燃えながら、  
黙つて光を吸ふ。

萌えたつ春の碧の空。

忍んだ冬の寒い憂鬱から、

南の春は解放される。

枯草の間の小さい草の葉、

菜の色、大根の色、

ふかぶかとかめた太陽の愛、

とけるやうなやはらいだ空氣。

しま

解放

路をゆるやかに行く農夫。  
その手が光る。  
その鍬くわが光る。  
輝いた地上の光に、  
とけて行く愛の世界の春。

— 日本近代名詩集 —

三〇 童心

北原白秋

聖心は童の心である。

越後の良寛(一)禪師は、殊にこの童心の持主であつたかうい  
ふ話がある。

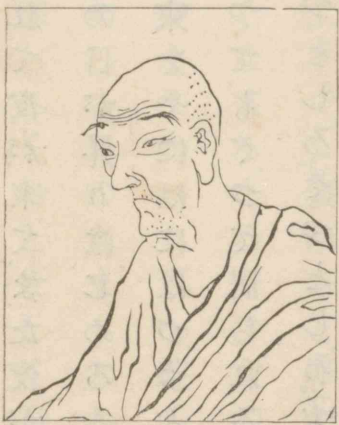
一に童男童女、二に手毬、三にお弾き。これが禪師の三好と  
いふ。これで見ても、良寛様がどんなに子供が好きで、子供た

聖心  
(一)越後國新瀧  
縣出雲崎の  
僧。詩詠を善  
くし、草書を  
巧くあつた。  
天保二年(二  
四九二年)致  
年七十四。



ちと遊ぶことが、またどんなに嬉しかつたかが思はれる。その良寛様も、子供たちには随分ばかにされて、盛になぶられたり、からかはれたりしたらしい。それにも拘らず、平氣で一所懸命に遊んでゐた良寛様が有難い。

或時、例の通り、子供たちと隠れんぼをして居られた。鬼になつた良寛様が目を瞑つて、「もういいよ」といふかはいい聲を、一心に待受けて居られる。と、ちやうど日の暮れ時で、子供の何が出来なくなる時である。家々の燈がちらちら點きだすと、子供たちは急に遊を止めて、一人残らず、こそこそと歸つてしまつた。そこは子供だから、良寛様も何もうつちやらかしである。無論いくら待つても、「もういいよ」といふもの



良 寛

はない。そのうちに日が暮れ、長い夜が來た。さうして、とうとう夜が明けてしまつた。良寛様はそれでも一所懸命だ。心から目を瞑つて、やはり同じ所に、同じ姿をしたまゝ、「もういいよ」と子供が呼ぶのを待つて居られた。その心の素直さ、さうしてその誠の篤さ、正直さ。それからまた或時のことである。良寛様が今度は隠れることになつた。そこで見つけられては大變だといふので、早速田圃の稻叢の中にもぐりこんで、それはかはいらしいことだ、それはそれは小さくなつて、まるで二十日鼠のやうに、頭から



やには

すつぼりと藁を被つて、おどおどして居られた。すると子供たちは、また例の通り、一人残らずこそと歸つてしまつたのである。それを良寛様は少しも御存じない。また日が暮れて夜が来て、また夜が明けた。稻叢には霜が眞白に置き、朝の日は昇りはじめると、百姓がやつて来て、何の氣もなく稲束をやにはにはづすと、おやつと驚いた。良寛様が小さくなつてもぐつて居られる。おや、良寛様が、「といふと、あわてて、そつとしろ。そつとしろ。子供が見つける。」

その心のあどけなさ、有難さ、まるで子供である。また或日のことである。その良寛様が男の兒や女の兒たちとお弾きをして居られた。沙門良寛全傳に、禪師頗る大勝

(一)西郡久吾編北  
越俾人沙門良  
寛全傳大正  
三年東京日  
書店發行

を博して、賭物のいり豆を多く得、と書いてあるから、よほどのり氣であつたらしい。ちやうどその時誰かが入つて来た。そして「おやおや、良寛様、なかなかあなた様はお弾きが御上手で。」と褒めると、罪がないこと、良寛様はほうつと面を赤くなさる。まるで少女のやうに、さもさも耻づかしさうに、そつとそのいり豆を膝の下におし隠したといふ。その心の初初しさ、そのきまりのわるさ耻づかしさは、全く佛の前に子供らしくおとなしく身を謙る心である。尊い聖心はすべてこの童心を源にする。もう一つお話する。或時、赤々と實がうれて、鈴なりになつた柿の木の下で、小



さい子供が一人泣いてゐた。良寛様が通りかゝつて、どうしたんだと圓い頭を撫でてやると、あの柿が食べたいといふ。「よしよし、それではわしが取つてあげる。泣くのではないぞ」といひながら、やつとこさと木の上にはひあがつた。枝にかまつて、あれかこれかと探してゐるうちに、それは全く旨さうな柿の實だ。一つ取つて口をつけると、それがおいしいのなんの。良寛様は夢中になつて、噛るは噛るは、まるで猿蟹合戦の赤いお猿のやうに、むしやむしやと食べてゐる。下にゐる子供こそ哀である。それを見て火のやうに泣叫ぶと、始めて良寛様も氣がついた。さあ、しまつた。これはといふので、あわてて枝を揺つたといふ話。思つてもそのあわて方のを

天稟

かしさ、罪のなさ、真正直さ、その子供らしさ、全く涙がこぼれるほど嬉しいではないか。

禪師の玉のやうなこの童心は、榮藏といつた童の昔からそのまゝである。それは何物にも替難い、二つとない尊い天稟である。

悄然

まだ榮坊が八歳か九歳の頃だつたといふ。或日父親からひどく叩かれたので、つい上目をした。そこでまたまた叩かれた。親を睨むやうな奴は、カマにカマになるぞ。これを聞いた良寛様の榮坊は、外へ出て行つたが、日が暮れても歸つて來ない。さあ家内中大心配で、あちらこちらと捜し索めると、或濱邊の岩の上に悄然と佇んで、沖の方ばかり眺めてゐた。榮坊どう



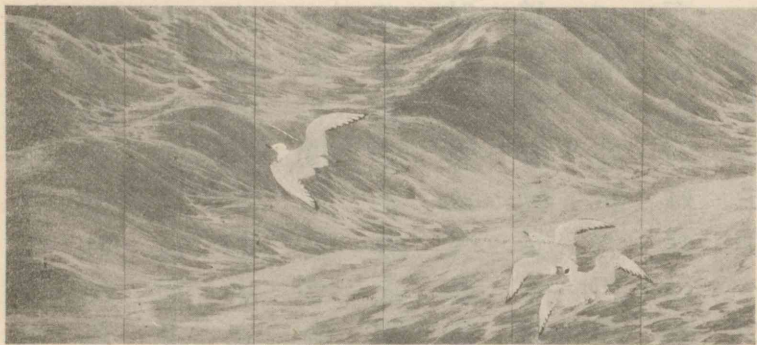
生一本

した。「といふと、榮坊いはく、「おらまだ鰈にならねえか。」  
 鰈になるといはれたので、ほんとに鰈になると思つて、一  
 心に海を視つめて顫へてゐた童心の正直さ。これをこそ生  
 一本といふのであらう。童を欺く大人こそ禍である。  
 聖心はこの童心を源とする。——洗心雜話——

三一 自然の生命の働

相馬 御風

三月もいつのまにか末になつた。この北國にもさすがに  
 この三四日愈、春が訪れて來たやうだ。山はまだすぐそこま  
 で眞白だが、海邊の里はすつかり地面が現れた。  
 けさ久しぶりで海濱へ出て見た。海は眠つてゐるやうに



(筆 翠 萬 田 本) め も か

靜かに霞んでゐた。漁舟はもう沖に出  
 てゐた。砂濱にはところどころに焚棄  
 てられたまゝの火が燃えほそつてゐ  
 た。漁師たちが沖へ出る前に焚いたの  
 であらう。白い煙が朝風にあふられな  
 がら、空へと消えて行く。海の上を飛ん  
 でゐる鷗の翅が銀色に光る。廣い砂濱  
 のあちらこちらに子供たちが紙鳶を  
 揚げてゐる。どの子供も裸足になつて  
 ゐる。久しぶりで大地をぢかに踏むこ  
 とが、どんなに彼等には快く感じられ



ることであらう。幾月かの間くる日もくる日も灰色をした雪雲に蔽はれてゐた大空が、漸くこの四五日碧い色を見せたのだ。彼等にはその久しぶりで仰ぐことを得た青空が、どんなに懐かしいことであらう。

夜の間降つた雨で、砂濱はまだしつとりと濕つてゐる。そのしつとりと濕つてゐる砂濱の上には、幾人かの人の足跡が印されてゐる。どの足跡も皆微かなうねり方をした曲線となつて、長く續いてゐる。どの足跡も一様にどこから始つてどこに終つてゐるかわからない。足跡と足跡とがまた互にもつれ合ひ亂れ合つてゐる所もある。

砂上の足跡。いつもながら私はそれに心を引かれるので

ある。

砂濱にはまた長い冬の間の荒波にうち揚げられた藻屑が散らばつてゐる。その藻屑の中には、さまざまなのが混つてゐる。桶の破片もある。布きれもある。いろいろな人の名などを書いた紙片もある。手紙や郵便葉書もある。人形の手や足などもある。壊れた子供の玩具もある。名刺もある。時にはどうしてこのやうなものがと驚かれるほどのものさへある。私はさうした藻屑の中に混つたさまざまなもの破片にも、時にひどく心を引付けられることがある。そして人形の破片一つについてすらも、果しない想像に誘はれることさへある。こんな風にして、久しぶりで晴れわたつた大空



の下に風ぎわたつた海を前に控へた朝の海濱に出て見た私には、そこにある何から何までが、今更のやうに深い興味を興へるのであつた。

春めく

春めいた晴天が續き、雪が消えて大地が面を現すやうになつてから、急に山の村の人たちの出てくる數を増した。海岸から一里も山へ入ると、まだそこには一二尺もの積雪があるといふことだ。けふも三里ほど山奥の村に居る友だちが訪ねて來ての話に、そのあたりはまだ五尺以上も雪が積つてゐるといふことであつた。

「かうして僕たちが海岸地方の様子を聞いて盛に出てく

るのは、自分では意識しないまでも、一日も早く「春」に遇ひたいといふやうな心持からだと思ふよ。三里もの道程を雪の上ばかり歩いて來て、急に雪のない大地を踏む時の氣持つてないね。」

その人はこんな意味のことをさへいつてゐた。

こんな話を聞いてから、この頃急に街上に數を増した山の村の人たちの姿を見ると、何となく歩き方からして違つてゐるやうな氣がする。

○  
つい三四日前まで雪に蔽はれてゐた大地の面は、目をとめて見ると、もうほんのりと青い草の芽がのぞいてゐる。雪





(筆生泰上水) 路山の雪残

が消えたぞ、それ大急ぎで芽を出せ。――  
草は決してそんな風にして春の活  
動を始めはしない。彼等はすでに深い  
雪の底にある間から、徐に春への働を  
續けて來たのであつた。私はいつもか  
うした急がずあわてない自然の生命  
の働――その沈黙の偉大な活動の前  
に、頭を下げずにはゐられない。

今さらに春を忘るゝ

花もあらじやすく

待ちつゝ、けふも暮さん

自然隨順の  
心

かう歌つた西行は、正にさうした自然の生命の沈黙の働  
に心をうち任せてゐた人であつた。それは決して、なるやう  
にしかならない。といつたやうな絶望的な心持ではなくし  
て、「なるやうになるものだ」といふうち任せた安らかさであ  
つた。私たちはさうした心だけでは生きられない。しかし、ど  
ん底にさうした自然隨順の心がなくしては、私たちの生活  
は危い。おのづからの偉大、いつしかにの尊さを外にして自  
分の生活を考へる時、私たちの苦みは到底救はれないであ  
らう。

數多くある良寛和尚の詩の中で、とりわけ繁く私の唇に



翠岑

のぼるのは左の一篇である。  
薪を擔うて翠岑を下る。

翠岑道平かならず。

時に息ふ長松の下。

靜かに聞く春禽の聲。

「靜聞春禽聲」の結句が、殊に私には懐かしいのである。「靜聞春禽聲」——私は時々わけもなくこの五字を書いて見たりする。「翠岑道不平」——この句も意味が深い。

——野を歩む者——

三二 若芽

吉江喬松

(一) 東京市麴町區  
宮城の東に接  
する一體の地

けはひ

三月の下旬、雨の細く降注いでゐる日、丸の内の堀に沿うて歩いて行つた。立並ぶ柳はすでに薄緑して、その下を人は傘を肩にして歩いて行き、電車は輕げに走り過ぎる。いづこともなく春のけはひが現れてゐる。  
ふと氣が付いて見ると、電車の敷石の縁に沿うて、若草の二葉が芽をふいてゐる。その芽の縁がいかにも鮮かで、元氣が籠つてゐる。若し雨が降り風が吹いて、電車の通行が十日も止つたなら、その草の芽は長く伸びて、敷石の上を覆ひ隠さう。その割目からは根が張つて、石をば碎きはてもしよう。怖しい力が二葉の中に包まれてゐる。  
實に「春」ではないか、今まで北の空の一隅に蹲つてゐた雲



浮々焉とし

(Nikolai)

東京市神田區  
駿河臺  
塔は大正十二  
年九月一日の  
大地震に破壊  
した

の群は、日の光に強く照らされて騒ぎだし、ちぎれちぎれに  
亂れて都の上を覆ひ、浮々焉としてニコライ塔の頂を掠め  
て飛び、帆檣のやうに群がり立つてゐる煙突の上を、鳶は輪  
を描いて舞つてゐる。風が吹くと輕塵が揚る。自動車を驅つ  
て日比谷の公園を廻る人も多くなつた。見給へ、この時都の  
中に入る所少しの空地でもあれば、春草が一面に生出で、日毎  
人の踏まないことのない電車路の縁にさへ、土を破つて草  
の若芽は萌出するではないか。

人生「敗滅」の姿は「春」に於て窺はれる。人は誇りに勝者の  
冠を戴かうとしてゐるその都會に、自然はなほもその怖る  
べき力を示して、人を嘲つてゐる。城は春にして草木が深い。

(一) 東京市京橋區  
市中最も繁華  
な所

(二) 孫悟空のこと。  
悟空は釋迦如  
來とかけをし  
て、如來の掌  
上から飛出さ  
うとしたが、  
どうしてもて  
きなかつた。  
西遊記に出て  
ゐる。

けれども草の深いのは獨り古城の址のみでない。今若し命  
じて一月の間車馬の通行を禁じ、人の往來を止め、各家戸を  
鎖して郭外地に立退いてゐたならば、その結果はどうであ  
らう。恐らく煉瓦を敷きつめた銀座の街頭も、忽ち青草の原  
と化しはすまいか。怖しい自然の力よ。——勝者と自信して  
ゐる人類も、畢竟大聖の掌上に踴つてゐた悟空のやうにや  
がてこの力に壓倒される運命をもつてゐるのではなから  
うか。私は自分で胸に描いた自然の力の怖しさを目前に見  
るやうな氣がして、さまざまな空想に耽りながら、堀端に沿  
うて歩いて行つた。

——若き自然——



(一)小説家。本名は長谷川辰之助。二葉亭四迷はその號。小説の創始者。明治四十二年歿。年四十六。

大鋸 おほのこぎり  
む おほがとも讀む

囃子 はやし  
鳴物で調子をとること。  
合の手 あひの手  
歌と歌との間にひ音曲にひきほひにおされる。

ボチ [自修文]

二葉亭四迷

嬉しいにつけ、悲しいにつけ、思ひ出すのはボチのことだ。春雨のしとしとと降る薄ら寒い或夜のことであつた。私は例の通り宵の口から寝てしまつたが、ふと目を覺すと、耳元近くに妙な音がする。ごうといふかと思へば、或は高く、或は低く、單調ながら拍子を取つて、さながら大鋸で丸太を挽割るやうな音だ。私は夜中にめつたに目を覺したことがないから、初はびつくりしたが、よく研究して見ると、なに、父の躰なので、やつと安心して、そのまゝ再び眠らうとしたが、どうもこれが耳について、寢附かれないし、方がないから、聞えるまゝにその音に聽入つてゐると、いつからとなく囃子の手がこんで來て、合の手に遠くで微かにきやんきやんといふやうな音が聞える。躰が凄じい時には、それに氣壓されて聞えぬが、躰が低くなると、はつきりと手に取るやうに聞える。不思議に思つて、益、耳を澄ましてゐると、次第に大きく高くなつて、遂には躰と離れ

離れに、確かに門前に聞える。

かうなつて見ると、疑もなく小犬の啼聲だ。時々喉でも締められるやうに、けた、ましく、きやんきやんと啼立てる。その聲尻がやがてだんだんに細く悲しげになつて、めいるやうに遠い遠い所へ消えて行く。かと思へば、忽ちまた近くで堪へきれぬやうに啼出して、くんくんと鼻を鳴らすやうな時もあり、ぎやおと欠伸をするやうな時もある。

私はそつと夜着のなかから首を出して、小さい犬の聲だねえ、どうしたんでせう。とうるさく母に聞くと、母は優しく、どこかの人を棄てた犬だらう。と、一々説明してくれて、もう遅いから、黙つてお寝と、あちらを向いてしまつた。

私もまた夜着を被つた。犬は門前を去つたのか、啼聲が稍遠くなるにつけて、父の躰がまたうるさく耳に附く。寝られぬまゝに、私は夜着のなかで棄犬の有様を繰返し繰返し考へた。まづどこかの飼

けた、ましく  
とんきやうに  
めいる  
しづみこむ。



犬が縁の下で兒を生んだとする。ちつほけな、むくむくしたのが重り合つて、首をもたげて乳房を探してゐるところへ、親犬が餘所から歸つて来て、その側へどさりと横になり、片端から抱へこんで嘗めると、小さいから、舌の先でたわいもなくころころと轉がされる。轉がされては大騒して起返り、またよちよちとはつて、ほつちりと黒い鼻面で、お腹を探り廻り、漸く思ふ柔かな乳首を探り當て、あわてて吸附いて、小さい両手で揉立て揉立て吸ひだすと、甘い温かな乳汁が出て来て、喉へ流れこみ、胸を下つて、何ともいへずおいしい。と、腋の下から、まだ乳首にあり附かぬ兄弟が、鼻面で割りこんでくる。取られまいとして、産毛の生えた腕を突つ張り、大騒をやつてみるが、とうとう取られてしまひ、またそこらを尋ねて、他の乳首に吸附く。そのうちにお腹もくちくなり、親の肌で身體も温つて、とろけさうな好い心持になり、つい、うとうととなる。含んだ乳首が脱けさうになる。夢心地にもあわててまた吸附いて、一しきり吸ひたて

お腹もくちく  
なる  
濡れになる。

足搔  
足の運動。

濡れしよぼた  
れる  
なびしよぬれに  
なる。

るが、ぢきにまたたわいなくうとうとなつて、乳首が遂に口を脱ける。脱けるも知らずに口を開いて、小さい舌を出したなりで、一向正體がない。その時忽ち暗闇から大きな腕がぬつと出て、正體なく寝入つてゐるところをむづとつかみ、宙につるす。驚いて目をほつちりあげ、いたいけな聲で悲鳴を揚げながら、四足を張つてもがくうちに、頭から何かで包まれたやうで、眞暗になる。窮屈で息が塞がりさうだから、出ようとするが、出られない。暫くもがいてゐるうちに、ふと足搔が自由になると、襟元をつまゝれて、高い高い所から、どさりと落された。うろうろとして、そこらを視まはすけれど、何だか變な寂しい眞暗な所で、誰もゐない。ぼんやりとしてゐると、雨に打たれて、見る間に濡れしよぼたれ、恐し



(筆 巢木村奥) ろこ犬



途方に暮れる  
どらしようか  
と方法にまよ  
ふ。

うんざりする  
よわりきる。

(一)全四巻。東京  
朝日新聞社發  
行

く寒くなる。身ぶるひ一つして、くんくんと親を呼んで見るが、どこからも出ては來ない。途方に暮れて、よちよちとはひ出し、夜中にただひとり、温かな親の乳房を慕つて悲しげに啼きまはる聲が、さつき一度門前へ來て、またどこへかさまよつて行つたやうだつたが、それが、いつかまた戻つて來て、どこをどうもぐりこんだのか、今は啼聲がまさしく立關先に聞える。

私はたまらなくなつて、母に頼んで、この小犬に食物を與へて、一晩泊めてやることにした。犬嫌ひな父は、泊めたその夜を啼きあかされると、うんざりしてしまつた。明くる日は是非追出すといひだしたから、私は小犬を抱いて逃げまはつて、どうしても放さなかつた。父は困つた顔をしてゐたが、しかし、それも一時のこと、その中に小犬も獨寢に慣れて、夜も啼かなくなる。追出すはずのものにいつしかポチといふ名まで附いて、姿が見えぬと、父までが一緒に捜すやうになつてしまつた。

二葉亭全集

革命  
九五の位

(Russia.)  
(露西亞)

(Siberia.)  
(西伯利)

不可解

### 三三三 皇室と國民

西洋各國の歴史を見よ。支那の歴史を見よ。一朝亡びて一朝興り、革命に次ぐに革命を以てし、きのふまでは九五の位にゐましし帝王にして、けふは斷頭臺上の露と消え給ひしも少からず。近くは全ロシア皇帝の、俄にその位より追はれてシベリヤに一流人となり、やがてはかなく成り給ひしが如き、我が國民より見れば、殆ど不可思議、不可解の感なくばあらず。外國の事情をのみ知りて、日本の國史に明らかならざるもの、動もすれば世界の近況を見て、我が國家の將來を危む。これ實に我が皇室と國民との關係を知らざる徒なり。



収斂  
姦臣

外國の歴史の記すところを見よ。國王と國民とは從來仇敵に等しかりき。國王はあらゆる豪奢を極め、あらゆる収斂を敢へてして、たゞ自己の慾を満たさんことに努め、姦臣これを助けて、暴虐至らざるなし。國民の憤怒は火山の噴火の如く、抑壓その極に達して後、革命となりて爆發す。歐洲各國の歴史皆然り。支那歴代の興廢は、幾回となくこれを繰返したるに過ぎず。王者と人民との争果しなきに至りて、民衆は自由を求めて止まず、その極るところ共和政府の設立となるは、今古外國史の示すところなり。

我が皇室、人民を愛撫し給ふこと初より父母の親みの如し。百姓を稱へてオホミタカラ(大御寶)と稱し給へるは、上古

豊穰

(一)第十六代。

(二)第六十代。

(三)後醍醐天皇御製。

(四)後柏原天皇御製。

治め知る

紛擾  
權臣

よりの事なり。人民は皇室の別家なりといふ考もて、自らヤッコ(家の子)と稱せり。古來の神祇を祀るや、天皇は民の爲に年の豊穰を祈り、人民は天皇の爲に玉體の安全を祈りて、曾て私の利害の爲に禱らず。仁徳天皇の宮室を營み給はざりし、醍醐天皇の寒夜に御衣を脱し給ひしを始にて、

世をさまり民安かれと祈るこそ

わが身に盡きぬ思なりけれ

治め知る我が世いかにと浪風の

やそしまかけてゆく心かな

の御製は皆同じ御心なり。

日本歴史の紛擾は、皇室間の御不和か、權臣が野心の結果



鞏固

にして、一として皇室と人民との間の争たるものなし。これ實に各國の歴史になきところにして、萬世一系たる皇統の、世々を経て益、鞏固を加ふる所以なり。

三四 君が御代

よみ人しらす

しほの山(一)さしでの磯にすむ千鳥(二)

君が御代をば八千代とぞ鳴く

藤原良經(三)

わが國はあまてる神の末なれば

日の本としもいふにぞありける

藤原俊成(四)

かみ風や五十鈴の川の宮ばしら

(一)山梨縣東山梨郡七里村。  
(二)同郡八幡村笛吹川の岸。  
(三)平安時代末の歌人。建永元年(一一八六)元治元年(一一八九)歿。  
(四)平安時代末の歌人。元久元年(一一八六)元久四年(一一九四)歿。

(一)鎌倉三代將軍。頼朝の第二子。承久元年(一一九一年)歿。  
(二)後醍醐天皇の皇子。

(一)京都の歌人。安政元年(一一五四年)歿。

幾千代すめとたてはじめけん

源實朝(一)

山はさけ海はあせなん世なりとも

きみにふた心われあらめども

宗良親王(二)

君のため世のため何か惜しからん

すててかひある命なりせば

本居宣長

さしいづるこの日の本の光より

高麗もろこしも春を知るらん

千種有功(三)

天地とたち分れけん始ありて

はてこそなけれ葦原の國



# 實業帝國新讀本 卷二 終

昭和二年十一月二日印刷  
昭和二年十一月五日發行

(本讀新國帝業實)

價 定	
自卷一 至卷四 各金七拾錢	自卷五 至卷八 各金六拾參錢
卷十九 各金五拾貳錢	

東京製本



編者 芳賀 矢一

發行兼印刷者 東京市神田區通神保町三番地 合資會社 富山房

代表者 合資會社 富山房社長 坂本嘉治馬

印刷所 東京市小石川區音羽町六丁目 富山房印刷工場

## 發行所

東京市神田區通神保町三番地

合資會社 富山房

電話神田一四四六 一四四九番  
振替口座東京五〇一番





広島大学図書

2000039193

